

281
26



始





緒方正義著

九大
と
人
物

大正
15. 5. 4
内交

目次

九大の沿革

九大の基礎福岡縣立病院	五
九州帝國大學創立	六
創立運動の經過	八
福岡醫科大學	四
創立十週年記念祝賀會	四
九大の發展	五
五大醫學會	五
所謂九大事件	五
農學部及法文學部創立	六
學士鍋の由來	六

歴代總長傳

大森治豐博士	一四
山川健次郎博士	一三
眞野文二博士	一三
大工原銀太郎博士	一三

各教室の沿革及び教授月旦

(いろは順)

醫化學教室と後藤元之助博士	一三
法醫學教室と高山正雄博士	一四
病理學教室と中山平次郎博士	一七
田原淳博士	一六
解剖學教室と小山龍徳博士	一四〇
櫻井恒次郎博士	一四二

眼科教室と大西克知博士	一四二
第二内科教室と武谷廣博士	一四
第三内科教室と小野寺直助博士	一四七
第一内科教室と金子廉次郎博士	一四九
藥物學教室と石坂友太郎博士	一五〇
第一外科教室と三宅速博士	一五一
第二外科教室と後藤七郎博士	一五二
整形外科教室と神中正一博士	一五四
衛生學教室と宮入慶之助博士	一五六
大平得三博士	一五
細菌學教室と小川政修博士	一六〇
産婦人科教室と白木正博博士	一六一

四

齒科學教室と問田亮次博士	一六三
小兒科教室と伊藤祐彦博士	一六四
耳鼻咽喉科教室と久保猪之吉博士	一六七
皮膚科教室と旭憲吉博士	一七一
泌尿器科教室と高木繁博士	一七三
生理學教室と石原誠博士	一七四
板垣政參博士	一七七
解剖學教室と進藤篤一博士	一七九
精神科教室と下田光造博士	一八〇
出色した人物評論と其の業績	
鈴木三伯	一八二
鈴木考二	一八三
關川一郎	一八五
竹内劍	一八六

五

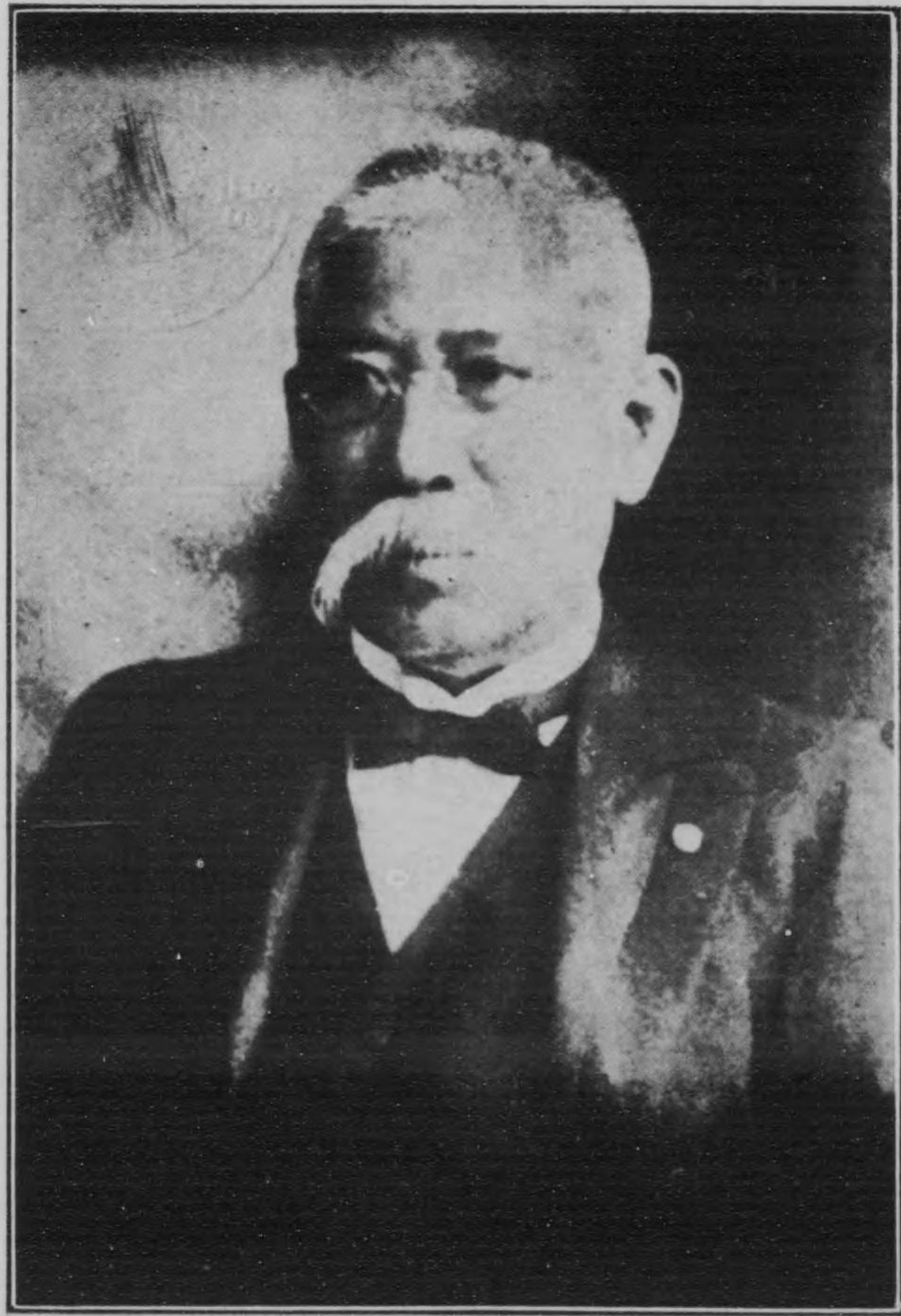
竹内清	一八七	新名常造	二〇二
武山定雄	一八八	重村正一	二〇四
谷野駿	一九〇	畑義雄	二〇五
田中利雄	一九〇	長谷川徳三	二〇六
田原盛	一九二	早石實藏	二〇七
角田俊吉	一九三	林能照	二〇八
土橋光太郎	一九三	半田久雄	二〇九
戸田忠次郎	一九五	一松美利	二一一
鳥居武雄	一九六	廣瀬信善	二一二
中村愛助	一九七	七田龍雄	二二三
永野達	一九九	菱川恒生	二三四
内藤三郎	二〇〇	平川武三郎	二三五
中村良貞	二〇〇	藤原教悦郎	二三七
長松英一	二〇二	藤木廣	二三八

二宮亮吉	三〇	森鼻正治	三六
星野信夫	三一	諸岡存	三七
細見憲	三三	森田松兵衛	三八
堀内秀治	三三	八代春雄	三九
穂積榮治郎	三四	安武正矩	四〇
前田清光	三五	山根正治	四一
松尾武幸	三七	吉永萌	四二
宮下耕圃	三八	渡邊泰	四三
三木利一	三〇	渡邊信吉	四四
三澤憲	三三	荒木齊造	四六
箕田貢	三三	淺田爲義	四八
向井久市	三三	安藤二平	四九
向井元享	三四	安達憲二	五〇
百瀬五郎	三五	足立清久	五一

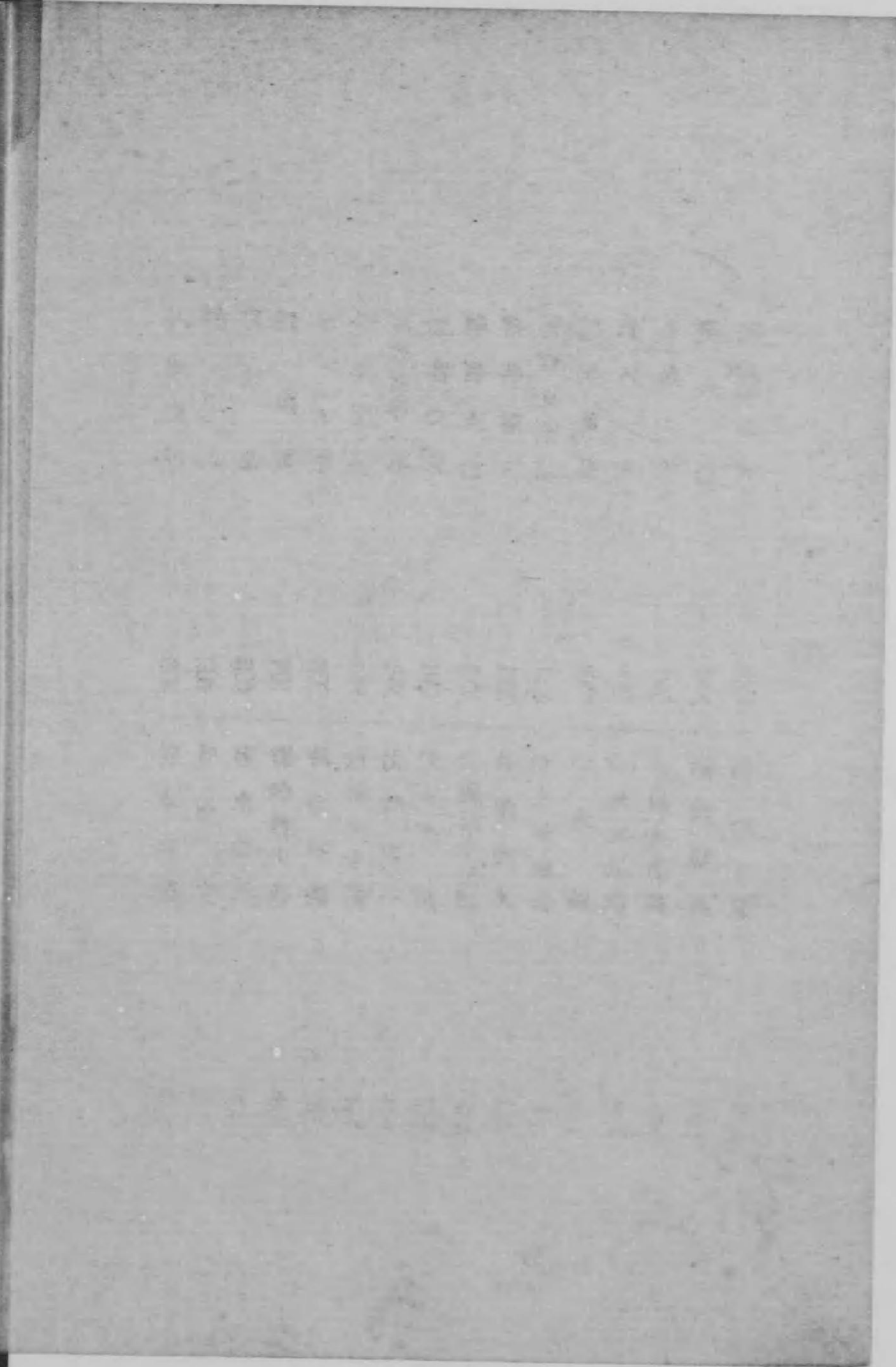
飯田豊三	三五	内田孝藏	五〇
伊藤應隆	三六	江浦重成	五二
井上三郎	三五	小畑郁	五三
石山福二郎	三五	小澤雄三	五四
伊藤久治	三五	大井義正	五五
井利映	三五	小川勇	五七
石藤文七	三六	奥田祐安	五七
岩淵友次	三六	大野章三	五九
岩永仁雄	三六	大野良藏	六〇
池上五郎	三六	大原清之助	六一
石原修	三六	小野貞衛	六二
飯島博	三六	奥島愛治郎	六四
宇木碩太郎	三六	大平記陳	六五
内村安太郎	三六	神林美治	六六

久保護躬	楠正人	窪田孝	隈鎮雄	木下友敬	金子慎吾	香宗加部壽	加藤尙義	勝野克巳	鴨井楠正	河野亮太郎	加地義雄	河村一郎	春日健吉	勝木任	河原治作
三〇五	三〇四	三〇三	三〇二	三〇〇	二九九	二九八	二九七	二九五	二九四	二九三	二九二	二九一	二九〇	二八八	二八七

鈴木諒爾	杉戸清	清水金三	篠崎哲四郎	執行作彌	新保十寸穂	佐野寅一	佐々木喬	佐藤三千三郎	佐伯義久	坂上虎彌太	坂本輯	合屋友五郎	久保木保壽	楠田彰司	黒川巖
三〇四	三〇三	三〇三	三〇二	三〇〇	二九八	二九七	二九六	二九五	三〇三	三〇三	三〇一	三〇〇	二九九	二九七	二九六



士博豐治森大故



序

緒方君近時大學教授の月旦を集めて一書を成したりといふ。予にその内容を示すことなくして其序を求む。予亦その内容を見ること無くして一文を寄す。君大學に出入すること年あり。觀察犀利、議論正確、批判公平、予の敬服する所なり。

抑々記者にして觀察犀利ならざれば、徒らに皮層淺薄の所見によりて誤りを傳へ、揣摩臆測の影に追ふを常とす。議論正確ならざれば正邪眞偽を解剖しがたく、大小要否の取捨を爲しがたし。批判公平ならざれば筆端感情に走り愛憎によつて人物を上下するに過ぎず。近來新聞紙の世相人物を記述するに其核心に觸るるもの幾何ぞ、況んや同黨異伐者流の曲筆の如き、具眼者の失笑を禁ぜざるもの多し。それ大學の碩學鴻儒たるものは己の専門域廓に隠れ、紛々たる世評を雲烟過眼視するが故に世評に何のかかはり無し

といへども、世上の大衆は新聞の記事によりて智囊を充し批判の尺度を作るものなれば君の著述は大學の何物たるか、及び大學教授の何物たるかを卒直正確に傳へ世人に自他共存の大悟を覺醒せしむることを信じ且つ望む。聊か所懐の一端を述べて君に贈る。

大正十五年大學記念日

梅かほる大名町の寓居にて

久保猪之吉

序

我が九州帝國大學が、其の礎を千代の松原にすえてから、既に二十餘年の月日が流れた。貧弱な一縣立病院から單科大學に、單科大學から綜合大學にと昇格し發達し、今や西日本隨一の最高學府として學界に輝く、隆盛な今日を見るには前後を通じて實に五十年の歲月を閲した。その過程を想へば實に隔世の感がある。然るに不幸昨年所謂九大事件なるものが勃發し、天下の視聽は九大に集められたが九大の前途は益々遼遠である。此の時にあたり、過去を顧み、將來の資料となす事は決して徒事ではない。又時代を論ずるには先づ其の人物を知らねばならぬ如く、我が九大を語るには、此處に生れた人物から之れを論ぜねばならぬ。之れ故に『九大と人物』を著る所以である。終りに臨んで之れを著するにあたり、多大の盡力をたまはつた久保教授を始め各教授に深く感謝の意

を表す。

尙工學部、農學部及び法文學部の事も蒐めたいと思つたが、之等は創立日尙淺いので將來増補でもする事にしやうと思つて、其の沿革だけを簡單に入れて置いた。

大正十五年三月

著者
しるす

九大の基礎

福岡縣立病院

日本の文明は九州から起つた。世界の文明の芽が總て海岸線に榮へたやうに、我が九州の文明も、博多灣のさざ波よする片ほとりに其の源を發した。九州帝國大學の所在地もやはり三十餘年前、豊かな傳説と史實とに富む此の千代の松原に定められた。

老松枝を交へて晝でも追剝が出て居た千代の松原を拓いて、福岡市西中洲にあつた福岡縣立病院が移轉したのは明治二十七年である。今からだともう三十年あまりになる。之れが即ち今日の九大の最初の礎となつたものである。其の當時までは、今の東公園は老松鬱蒼として多數の狐が居つた。今の稻荷神社は最も狐の多かつた處に建つたものであると云ふ。此の恐ろしい程淋しい松林の中に建つた、ささやかな病院の薬局は、田舎の人から箱崎の八幡さんと間違へられて、いつもお賽錢が降つて居た。外觀頗る貧弱で

あつた此の病院は、それでも内容に於ては實に日本一の模範病院と云はれて居た。院長の大森博士が歐州知名の病院の設計圖を蒐集し、之れを参考として、我國では未だ他の病院等には思ひも寄らぬ蒸氣機關や炊事設備、手術室、蒸氣消毒裝置等を小規模ながらも設備した。此の模範病院の中に我が九大の生みの親大森博士は又他の醫者が及びもつかぬ帝王切開手術を鮮かな技倆で平氣でやつてのけた。全國の津々浦々から「腹割りの大森さん」と云つて、患者が日々押し寄せたものである。かうして福岡病院は天下に喧傳され、毎日全国各地から病院視察にやつて來る者が多かつた。間もなく此の福岡病院をすつかり眞似た病院が全国各地に建てられた。かくて此の福岡病院は九大の基礎を築いたばかりでなく、全國各病院の基礎となり、我國醫學の發祥地ともなつた。

九州帝國大學創立

抑々九州帝國大學を設置しやうと云ふ議の起つたのは明治三十四年十月十八日であ

る。當日午後二時福岡市長松下直美氏は市役所に商工會長渡邊與三郎氏を始め同會重役五六名を召集し九大設置の協議をなしたのである。其の後やがて九州醫科大學設置期成會なるものが組織され、松下市長は自ら其の委員長となつて運動を開始した。其の當時熊本市でも熊本醫學校を九州醫科大學に昇格すべく運動を開始したので、茲に熊本、福岡兩縣の間に猛烈な誘致運動が起つた。福岡では縣立病院の大森院長が屢々上京して熱烈なる運動をなす一方縣民も亦寄附金の募集や輿論の喚起に努めて之れを應援し、遂に二ヶ年にして廣大な敷地と建物とを寄附する事に決定した。それで熊本は敗れ、明治三十六年福岡病院を京都帝國大學の一分科として福岡醫科大學とする事になり、病棟の増築校舎の建築をなして他日九州帝國大學たるの素地を造つた。かくて大森博士は最初の學長に就任した。

創立運動の経過

八

九州帝國大學設置運動に就ては、大森治豊博士は勿論、當時福博有志の意氣込みは猛烈なものであつた。此の運動がなかつたなら或は今日の九大も、又福岡市今日の發達も見事が出来なかつたかも知れぬ。實に此の運動こそ九大の歴史とはなれる事の出来ないものである。此處に當時の記録を辿る事にする。

明治三十四年即ち今から二十四年餘りになるが其の年十月十七日である。當時の福岡市長松下直美は

商工會事務所にて明十八日相談したき事あるに就き市役所に出頭ありたし。
と商工會頭渡邊與三郎を始め同會重役五六名に通知を發した。

十月十八日

商工會事務所にて午後二時渡邊與三郎、原田壽雄、他十一名集會した。松下市長及び丸

田重雄は福岡病院附近に醫科大學設置の計劃があるが福岡市民で何程位の金を負擔し得べきか云々の事をはかり、午後五時十分まで種々協議をして散會した。尙右二名の他の出席者は、社家間善次郎、立石善平、鷹見清三、倉成久米吉、進藤上枝、林寛一郎、渡邊綱三郎、太田勘太郎、三苫寛一郎、岡松與八、古森藤次郎等であつた。

十月十九日

午後四時より商工會事務所、松下市長、丸田重雄、商工會頭渡邊與三郎他二十五名出席し、大學設置の運動方法に就いて協議し、其の運動委員を選んで早速明二十日から運動に着手することになつた。運動委員は左の十名である。

渡邊與三郎、原田壽雄、三苫寛一郎、倉成久米吉、進藤上枝、林寛一郎、古森藤次郎
小川鐵磨、川上藤三郎、吉原敬介。

十月二十日

午前八時運動委員は緒方道平及び松下市長訪問。同日午後六時商工會事務所にて集合。

九

運動の部署を左のやうに定めた。

渡邊與三郎は小河久四郎を訪問。

社家間善次郎、渡邊渡三郎、岡松與八、原田壽雄、林寛一郎、川上藤三郎、兒島善次郎の七名は縣會議員望月、溝田を訪問。

倉成久米吉、古森藤次郎、渡邊綱三郎、八尋孫三郎、原田壽雄の五名は城石彌一郎を訪問。

林寛一郎、渡邊與三郎、山下幾次郎、倉成久米吉、古森藤次郎、渡邊綱三郎の六名は平岡浩太郎を訪問。

渡邊渡三郎、岡松與八、川上藤三郎は大森武雄を訪問。

原田壽雄は宮川武行を訪問。

十月二十一日

青柳宅を當分大學設置運動事務所と定む。此の日頃より段々運動員は増した。かくて

此日は各委員の擔任を定めた。

運動事務所誌

渡邊與三郎、進藤上枝、社家間善次郎、渡邊渡三郎、立石善平。

事務所誌庶務擔當

倉成久米吉、原田壽雄、大熊淺次郎。

其他岡松與八、太田清藏他八名は各縣會議員訪問者となり。古森藤次郎他七名は廣辻筑紫郡長、新納粕屋郡長の訪問者となつた。

十月二十二日

午前九時藤代議士は事務所に来て大學設置に就ての經過を縷陳し、午後十時頃富安縣會副議長も來訪し之れに關して協議した。かくて有志者に參集するやう通知を發し、尙大學設置運動上便宜のため『大學設置期成會』を組織し、委員長、副委員長を選定し、委員長の指名により、總務委員、常務委員、會計監督を置くことに決した。又今後の運

動方法に就いても協議した。後ち出席者中各部署を定め直ちに縣會議員を其の宿所に訪問した。

期成會役員

委員長 松下直美

副委員長 緒方道平

總務委員 林寛一郎、渡邊與三郎、丸田重雄

常務委員 倉成久米吉、大熊淺次郎、原田壽雄

會計監督 深見平次郎、遠藤甚藏、八尋孫三郎、大隈壯太郎、牟田口宗七、横田

正次郎

十月二十三日

事務所集會者 松下委員長、藤代議士、多田代議士他三十三名
藤代議士運動上の經過を報告した。

廣辻、新納兩郡長等多田代議士等と協議するところがあつた。

大學設置敷地豫約相談のため部署を定め地主を訪問。

醫科大學設置に就て縣有財産及び不動産寄附の件に就いて臨時縣會を開催するが秘密を要するので本日から来る二十七日迄休會することに運動した。

午後委員退散後青柳を引き拂ひ事務所を丸萬宅に移す事になり、直ちに同家に交渉して同夜移轉した。

十月二十四日

事務所出席者 松下委員長、長倉視學官以下二十七名

午前委員は各部署を定めて地主を訪問した。

宅島徳十郎其の他の地主を古賀壯兵衛宅に召集し委員出張して夫れづゝ協議し、豫約をした。

筑紫郡長は關係地主一同を皆松館に召集して土地買収の協議を凝して居たので松下委員

長、丸田重雄は同協議に參與のために出張した。

十月二十五日

午前八時、事務所を集る者三十名。

渡邊與三郎他十二名が豫定敷地地主に交渉した結果、市民の所有にかかる土地の交渉は遂に纏る。

廣辻郡長、庄野縣會議長及び書記事務所に来り松下委員長と豫定敷地豫約買収の件に就き協議し、一同帰宅したのは午後十一時四十分。

十月二十六日

出席者 三十四名。

西村庄平、牛尾量藏の所有地の交渉纏る。筑紫郡の内豊平其の他の土地買収豫約に就き一兩日前より廣辻郡長を始め其の他の人で百方交渉をしたが容易に纏らないので之れが善後策を講ずるため各委員に即時事務所に参加する様通知をだした。

今後の運動に就て協議するため、明二十七日事務所に参加するやう各委員を始め重立つ者に向け二百十三通の書面を發送した。

十月二十七日

出席者 九十四名。

松下委員長は醫科大學設置の機運になつたのを説明し、又委員の運動経過を報告した。尙丸田重雄も委員長の話と略變らぬ事を述べた。

藤代議士は大學設置に關する政府の意嚮並に本縣選出代議士の政府に對する運動等を説き、大學設置の曉には打算して何程の利益を得る等を縷陳し、又菊池文相來福するに就き歓迎すべし云々と述べ、歓迎準備は參會者中より特別委員を選定し之れに一任する事になつた。

菊池文相歡迎會委員

委員長 緒方道平

文相送迎庶務掛 溝部信孝(以下略)

縣會に於て大學設置の事に協賛した曉には貴衆兩院議員に運動する方法を確定すること。来る十一月十八日製鐵所開場式に臨む貴衆兩院議員を當市に招待するや否やを藤、多田、平岡等の意見を叩き其の方法等を定め退散したのは午後九時十分。

十月二十八日

午前十時 市會に大學設置の件を附議し滿場一致を以つて可決した。尙午後一時より同件を縣會に附議し、是又滿場一致を以て可決した。

午後三時より松下委員長を始め各委員市役所に集合し、寄附金募集の順序として福博中の町總代を氣儘亭と西公園に招集することにし、料理等の準備は會計監督六人で負擔し、總代への通知は常務委員の擔當と定めた。

明二十九日より大學設置期成會を福博商工會事務所に合併することに決し十一時過ぎ散會。

大學設置の豫定敷地は左の通りである。

福岡病院敷地三萬四千一百六十二坪。縣有地千三百四十三坪。官有地一萬九千三百四十四坪。縣有避病院敷地千四百五十六坪。官林四百八十八坪。道路溝敷四千四百三十一坪。本市より寄附二萬六千七百一坪。總計八萬七千九百二十五坪。

十月二十九日

今日より期成會事務所を商工會事務所に移し、同所で事務を取扱ふ。

評議員、常務委員、會計監督等の役員を選定し、其の當選者に向け夫々通牒を發した。

十月三十日

出席者 松下委員長以下九名。

菊池文相十一月一日即ち明後日來福の筈に就き文相歡迎會を開催する事に決した旨を二百一名に通知狀を發し尙六名の代議士に打電した。

十月三十一日

松下委員長始め多数出席。明日來福する文相の接待其他掛員の分擔を定め、又餘興
其の他の準備の協定をした。

十一月一日 出席者五名。

十一月二日

臨時雇二名を置く。出席者六名。

十一月三日

出席者三名。

明四日博多郡町總代を氣儘亭に招待する事になつて居るので其の案内狀百四十通を發
送した。

十一月四日

出席者三名。

午後五時から氣儘亭に博多町總代を招待した。委員長以下八十名出席。委員長及び丸

田重雄より大學設置の必要より運動費用を要する件に就き詳細説明があつたが、何れも
其の必要を感じ、町總代は該費用取立に充分盡力することに決し、満場一致賛同、博多
式の一本を入れて事の遂行を誓つた。十時十分散會。尙不參の町總代には折詰を夫々送
附したが其數は五十二個である。

十一月五日

出席者 原田壽雄。

福岡部町總代五十八名、有志六十三名、合計百二十二人に向ひ來る七日午後二時鐘美
亭に參會するやう夫々照會した。

十一月六日

出席者 原田壽雄。

前記案内狀を發送した。

十一月七日

午後二時より松下委員長以下西公園鐘美亭に行く。参会者は町總代有志者六十八名。松下委員長、丸田重雄より大學設置の必要の説明あり。八時十分散會した。尙本縣選出代議士九名に來る十一日市役所に参会するやう松下委員長より照會があつた。

十一月八日

出席者 原田壽雄。

松下委員長の命を受け、原田壽雄、山下幾次郎、永村永の件に就き溝部信孝に交渉明日會計六名、午後一時から事務所に参加するやう照會した。又明後十日午前九時から事務所に参加するやう評議員に向つて通牒した。

十一月九日

松下委員長、溝部信孝、原田壽雄協議し、評議員九名を増員することにし、夫れど其の囑託書を發送した。

午後二時より正副委員長、會計四人、常任委員等會合して本日迄の經費を精算した。

午後六時頃突然評議員十三名を増員することになつたので三角丑郎を雇ひ右十三名明日出席の評議員に推薦した旨を通知した。

八代議士に向ひ明後十一日市役所に参会するやう照會した。

十一月十日

午前十時より事務所の評議員會を開き左の事項を決議した。

- 一、大學設置運動委員を東京に派遣すること
- 一、前項の委員は市長及び兩政派より各派一名宛都合三名を派出すること
- 一、兩派より上京せしむる委員の選擇は代議士に一任すること
- 一、前項委員選定に付代議士への交渉方を本會委員長に依託すること
- 一、上京委員に給與する費額は一人につき一日五圓宛とし、往復一人六拾圓とす
- 一、東京に於ける委員の運動費總額は約貳千圓を以て程度とすること
- 一、運動費に充るため各市各町より醸出する金員は助役に於て保管すること

一、前項の費用金募集委員及び其の人員は松下委員長の指名に一任すること
一、委員長の商議に應ずるため、福岡及び博多より各二名宛の相談役を設けること其の人名左の如し。

博多部 丸田重雄、渡邊與三郎、福岡部 進藤喜平太、岡部覺

一、本會事務所を市役所に設けること

以上の決議をして午後三時散會した。

十一月十一日

本日より市役所樓上に於て本會事務を取扱ふことになった。午前九時から市役所に相談役集合し、種々協議の結果明十二日評議員會を開き、寄附金を至急に集金する方法を評議員會に附議する事に決し、夫れく評議員に照會した。午前十時各代議士市役所に參集したので松下委員長より上京委員の選定を代議士に交渉した。

十一月十二日

評議員會を開き左の事項を決議した。

一、市内各町總代に向ひ、本月末迄に各町寄附金割合額を取纏め方の依頼狀を發すること

こと

一、右寄附金標準は所得税、營業稅、雜種稅、戸別割の各稅率に據り定むること

十一月十三日

福博各町總代及び有志者に向ひ寄附金の割合を夫れく發送した

十一月十四日

明十五日相談役及び會計に參會するよう照會した。

十一月十五日

午前十一時相談役及び會計監督會を開いた。當日の決議事項は左の通りである。

一、委員長副委員長不在中は市助役を以て代理せしむること

一、事務所の日給四十錢の雇を聘雇すること

一、右雇員の監督は原田壽雄を以て擔任せしむること

一、上京委員の旅費は來る二十七日迄金參百圓を委員二名に交付する事

一、來る二十五日迄寄附金を取纏めるように町總代に照會することに決す、そして町總代には直ちに通知狀を發すること

一、福博兩方面に依り寄附金取纏め委員を定むること

十一月十六日

平田農相を一方亭に招待した。

十一月十七日

記事なし。

十一月十八日

濱尾新、太田峯三郎十九日來福に付其の歡迎の準備を一方亭にした。

十一月十九日

濱尾、太田兩氏を一方亭に招待し晝餐を共にした。

十一月二十日

根津一の講話あるので出席するよう照會した。

平賀義美を常盤館に招待した。

十一月二十一日

記事なし。

十一月二十二日

松田正久、龍野周一郎來福の筈に付き、豫め其の準備をしたが都合により來福延期の旨通知があつた。

露國駐在栗野全權公使明二十三日午前八時當地發列車にて赴任の筈に就き、商工會の重立つ者に見送る様通知す。

十一月二十三日

三角丑郎を解雇して、荒牧護助を雇入れる。

十一月二十四日

明二十五日相談役及び會計監督事務所に向向するよう照會。

松田正久、龍野周一郎來福したので一方亭に招き晚餐を共にした。

十一月二十五日

今回上京する委員三名を招待するや否や及び、寄附金取纏めの件を相談役及び會計監督に協議。

十一月二十六日

横田正次郎、大隈壯太郎、遠藤甚藏に寄附金取纏め方の實況調査を囑託。

森田正路より上京旅費受取方を請求して來たので東野書記より交付、溝部信孝にも同様に交付。

十一月二十八日

評議員會を開き、左の決議をした。

決議事項

- 一、常務委員には年末相當の慰勞手當を贈與すること
- 一、商工會書記雇及び小使にも年末前項同様の手當を與ふること
- 一、渡邊與三郎より借入した金は寄附金より直ちに返却したが利子を受取らないので、其の利子に相當する物品を贈ること、尤も手當並に物品其の金高は總て委員長に任すること
- 一、松下委員長東京より運動費の請求ある時は、委員長代理者は寄附金を以て之れが需に應ず。萬一寄附金が其の請求額に不足した時には、委員長代理は相談役を招集し之れが處分に就き協定すること
- 一、寄附金の取扱方は常務委員原田壽雄其の請求書を調査し、之れを會計監督に交付し監督は委員長代理の承認を経て、市助役其の金錢の出入を司るものとす

一、寄附金取經方は町總代並に其の方面にて委員長から曩に囑託してあるので各委員に於ても盡力するは勿論であるが、此の際協議員は其の住所附近の町總代及び受持人に付き、至急纏めるよう充分盡力すること

右を満場一致可決した。

十一月二十九日

午後五時より九方に於て評議員一同會主となり上京し運動に着手する松下委員長、富安縣會副議長を招待し、送別の宴を開いた。

十一月三十日

松下委員長、富安縣會副議長、午前八時十分博多發にて上京したので本會員の主なるものは博多驛及び箱崎驛迄見送つた。

十二月一日

記事なし。

十二月二日

記事なし。

十二月三日

相談役會を開いたが、何れも差支へあり出席者がなかつた。

十二月四日

記事なし。

十二月五日

上京中の松下委員長より金送付の通知があつたので明六日より不納町に向け催促者を出すことに決した。尙本日より雇書記市委員一名を派し博多各町總代及び有志者に就き請求させる。

十二月六日

記事なし。

十二月七日

引き続き福岡部を請求す。

十二月八日

本日でやつと不納町請求終る。

十二月九日

緒方道平（副委員長）歸縣。

明十日相談役四名へ事務所に参加する様照會す。

十二月十日

副委員長及び相談役協議し、明後十二日評議員會を開く事にし、夫々通知を出す。又

小野漸一郎、平井郷昌、井上傳次郎の三名に評議員囑託書を送る。

十二月十一日

記事なし。

十二月十二日

評議員會を開き左の決議をした。

決議事項

- 一、運動費に要する寄附取纏め方は、評議員中より副委員長特選指名す、取纏め方法は其の特選された委員で便宜に部署を定め、本月十七日迄に全部取纏めること
- 一、前項奔走に要する實費は本會より支出するものとす
- 一、金壹千圓を借入し在京委員に送付すること
- 一、前項借入金債務者は評議員一統責任連帶とす、但し借入方法は副委員長及び相談役に一任すること

本會を縣の問題とするや否やの發議があつたが、本縣教育會を代表して富安縣會副議長が上京してゐるので、副委員長は丸田重雄と協議し、縣會より富安に對し聲援させるよう交渉することに決した。

十二月十三日

寄附金取纏め特選委員十名に向け囑託書を發送した。

十二月十四日

特選委員十五名に明十五日商工會事務所に參會するように照會した。尙松下委員長に

十二日の評議員會の決議を通知した。

十二月十五日

特選委員は部署を定め夫れく奔走した。

十二月十六日

記事なし。

十二月十七日

記事なし。

十二月十八日

記事なし。

十二月十九日

上京中の松下委員長より電報があつた。其れに就き協議のため緒方道平（副委員長）を始め八名參集種々協議をした。進藤上枝、竹森算は博多部の寄附金取纏めに奔走し荒牧履は福岡部の取纏に奔走した。又上京中の古森藤次郎より運動費送付方を原田壽雄に電報が來た。

十二月二十日

松下委員長より金送付の電報が來たので明二十一日相談役、會計監督事務所に參會するよう照會した。

十二月二十一日

前日の照會により相談役、會計監督參集し、左の決議をした。

決 議

一、十七銀行より金壹千圓を、副委員長、相談役助役の名義にて當座借入をなし、本會役員調印の證書を引換るものとす、但し利子は一ヶ月一分の割。返却期日は明治三十五年二月二十八日限りとすること。午後二時二十分、一千圓借入る、事に決したが、明日日曜であるので明後日二十三日送金する旨を委員長に打電した。

十二月二十二日

日曜休み。

十二月二十三日

運動費借入に付き相談會を開き、原田壽雄が本會役員一同の連帶借用證に實印押捺のため奔走した。午後二時金壹千圓を電報爲替で送つた。

十二月二十四日

竹森算、荒牧雇兩人は共に福岡部未納町を請求して歩いた。

十二月二十五日

竹森算、荒牧雇は更に博多部を請求して歩いた。尙濱田市書記に博多部請求を委員長より囑託された。

十二月二十六日

記事なし。

十二月二十七日

福岡部請求のため西川頼成を當分雇入れた。

豫算案衆議院を通過

十二月二十八日

委員長より只今大多數にて九州醫科大學設置の豫算が衆議院を通過した旨の電報あり居合せた一同大いに喜ぶ。尙金三百圓を請求により委員長に送附した。柳瀬賢造解雇。
十二月二十九日

西川頼成解雇。

十二月三十日

竹森算、原田壽雄出席し、代議士及び富安歸縣するので主なる人に電話した。午後六時一行博多着、一同出迎へた。夫れより経過報告會を兼ね招待會を開き午後九時頃散會。

十二月三十一日

在京代議士八名及び上京委員三名に年始狀を兼ね、慰安狀を發した。

明治三十五年一月

一日より十一日迄休日やら正月の行事等で記事なし。

一月十二日

今後の運動上及び寄附金取纏方法に就き、來る十四日評議員會を開く旨を一同に照會した。

一月十三日

記事なし。

一月十四日

午後一時より評議員會を開いて左の決議をした。

決議

一、福岡部、博多部各三名宛、寄附金取纏委員を選定すること、但し委員選定は副委員長に一任すること、尙其の運動の費用は實費を給すること。

一月十五日

金四百圓を委員長宛に送附。

一月十六日

原田壽雄をして渡邊與三郎へ金百五十圓を返却。

一月十七日

松下委員長の打電により至急評議員に集會するよう照會した。

一月十八日

前日の照會により各評議員參會し、左の決議をした。

決議

- 一、運動費五千圓の内貳千圓を東京運動費とし、壹千八拾圓を委員旅費日當、其他を地方運動費と豫定して居たが、目下東京の運動激烈なため右運動費の區分を取消す事
- 一、上京委員長より貴族院運動熾んなるため金壹千圓を送附せよと電報があつたが目下寄附金を取纏めたる分では不足するので先例に倣ひ壹千圓を評議員連署にて十七銀行より借入るゝ事
- 一、運動費寄附の件に就き粕屋、早良、兩郡に交渉を丸田重雄に依頼すること
- 一、運動費五千圓では不足に付尙千五百圓増額の事を會員總會を開き評議すること、但し其の方法等は次會に評定のこと

一月十九日

記事なし。

一月二十日

十八日評議員會に缺席した評議員四十名に決議事項を通知。

一月二十一日

記事なし。

一月二十二日

渡邊與三郎へ金百五拾圓返却、之れにて總て返済。

一月二十三日

頻々送金の請求が來るので副委員長、相談役、助役六名の名義で借入れた金四百圓を委員長に送る。

一月二十四日

記事なし。

一月二十五日

金壹千圓の借用證を書き、評議員一同へ連署させ前證書と引換ふる事になり、荒牧雇を本日より實印取纏に従事させる。

一月二十六日より二十七日迄

記事なし。

一月二十八日

松下委員長より溝部上京委員歸福に付、評議員召集の事を電報あり。

一月二十九日

先日の照會により評議員參集し、左の決議をした。

一、寄附金未納を最寄評議員にて來る五日迄に取纏むること

溝部信孝本日午前九時歸福。

一月三十日

記事なし。

一月三十一日

溝部信孝 午後六時上京

金參百圓を銀行小切手で溝部に託し委員長に送る。寄附者人名調べの依頼狀を既納町總代六十名に使丁を以て發遣。

二月一日から十三日迄

記事なし。

豫算案貴族院を通過

二月十四日

午後一時在京松下委員長より電報にて四十八人に對し百四十七人の多數にて豫算は貴

族院を通過した旨の電報がある。

二月十五日

豫算はいよ／＼貴衆兩院を通過したので、松下委員長以下午後四時着にて歸縣の旨を評議員一同に通知。

二月十六日より十七日迄

記事なし。

二月十八日

松下委員長以下の上京運動委員は午後四時十分博多驛着にて歸縣、主なる人は門司迄出迎へた。同夜有志二十餘名の發起で常盤館に慰勞會を開いた。

二月十九日より二十四日迄

記事なし。

二月二十五日

經過報道會を開く。

三月二十一日

祝賀會を開く事に決した。

場所 東 公園

期日 四月三日

四月三日

午前八時より東公園に役員集會し午後一時祝賀會開會、黒田侯の祝辭等があり町總代及會員に折詰を配布し、歡をつくして三時散會、出席者約六百名に上る。第二次會を常盤館に開く、出席者二百餘名、午後七時黒田侯の御臨場あり、委員長以下の挨拶、餘興等があつて、盛會裡に十一時閉會した。

昨年十月十七日より今年四月三日祝賀會を擧げる迄實に六ヶ月に亘り、やつと醫科大學は設置される事に決したのである。

福岡醫科大學

福岡醫科大學となつてからは、縣立病院時代から居た伊東、後藤、熊谷の三教授の他に明治三十八年四月現京大産婦人科教授高山尙平、同六月には林春雄、八月には中金一等の醫博が來任し益々内容の充實を圖つた。四十年にいたり目出度く第一回卒業生五十八名を出す事を得た。此の五十八名こそ譽ある九大最初の卒業生であるが、九大の外科教授後藤七郎、熊本醫大産婦人科教授池上五郎、岡山醫大外科教授赤岩八郎の他福島榮太郎、前田清光、山本耕橋等の醫博は此の中の出色した人物である。其の後福岡醫科大學は、四回に亘り三百三十名の新醫學士を社會に送り出して、九州醫科大學となつた。

福岡醫科大學が出来た翌年勃發した明治三十七、八年の日露戦争は、我國の各方面に多大の進歩を與へた。國民は齊しく戰捷の祝盃を上げながらも、學術研究の一日も忽に

すべからざるを痛感し覺醒した。此の時にあたり、當然の順序として、我が福岡醫科大學は京大より切り離して一個の獨立した帝國大學とし、面目を一新せねばならぬと、大學當局は勿論、地元の福岡市は躍氣となつて猛烈なる運動を始めた。然るに戦後の財政は逼迫し、容易に之れを許さなかつた。それでも一度燃え上つた此の運動は決してそんな事で消えなかつた。却つて大學と地元は一團となつて運動は一層熾んになつた。遂に又地元は敷地建物の寄附を申出で漸く工科大学を設置する事に決した。明治四十三年十二月即ち福岡醫科大學となつてから七年目に九州帝國大學は設置され、翌年四月京都帝國大學福岡醫科大學は九州帝國大學醫科大學と改稱し、茲に全く獨立し、總長に理學博士山川健次郎伯が任命された。當時福岡醫科大學長であつた後藤元之助博士は同時に九州帝國大學醫科大學長となつた。かうして翌五月には御親署の教育勅語が下賜せられ、學生の制服制帽が定められた。明けて四十五年七月始めて九大となつてからの第一回卒業證書授與式を舉行された。

創立十週年記念祝賀會

福岡病院から京大福岡醫科大學に、京大福岡醫科大學から九州帝國大學醫科大學へとトントン拍子に昇格して來た當時の學生は、意氣軒昂であつた。曰く昇格運動、曰く祝賀會を開くと、殊に大正二年十月揚げられた創立十週年記念祝賀會は、全く當時の學生の意氣を示すものである。同祝賀會は學生の提案により、教授會に諮つたが否決された。然るに時の闘士であつた、現海軍々醫學校の鈴木諒爾、九大精神科助教授諸岡存、福岡市に開業する河原治作、又横濱に開業する栗原清一等は實行委員となつて遂に學生主催の下に六日間に亘り盛大な祝賀會を催し、大隈伯爵まで態々東京から引つ張り出したものである。

時の記録をたどつて當時を偲ぶ事にする。左は祝賀會の由來として發表したものを省

略したものである。

個人には個人特有の絶叫がある。團體には團體特有の絶叫がある。國家には國家特有の絶叫がある。熱心と努力の前には自然と途が開かれるやうに、熱心な絶叫は人々の心に強い共鳴を起すものである。十週年記念祝賀會舉行に就いての學生の絶叫は純一なもので、高い響と調子を漲らせて居た。過去を回想して將來の資料とするには、何等の拘束もない筈である。十週年記念祝賀會に就て學友會理事委員は之れを總長に諮り、總長は教授會に附議したが、時の餘りに早きに失すると云ふことで否決された。しかし學生は學生が衷心の正當なる要求を満足せんがために熱議遂に學生主催の下に決行することに決した。熱心と眞面目の趨く處、之れを阻害するの途なく實行の方法は勞せずして講ぜられた。かくて愈祝賀會は十一月十六日から六日間に亘つて開く事になつた。

創立記念祝賀園遊會

祝賀會の第三日目東公園に園遊會が開かれた。廣い公園は人波の押し返す海と化した。紺碧の空を顫はせて、合圖の煙花は人々の心に歡喜の響を傳へた。緑のアーチの下をシルクハットが通る。角帽が動く、貴婦人が来る、令嬢も見える。二輪加、落語、素人曲藝、手品、淨瑠璃、場内は全く享樂の巷と化した。

伊東學長は小刻みに走るやうに歩き、石原教授は中の島に立つて池を眺め、小山、田原教授は縫れ合ふやうにして、葡萄酒店をのぞき、櫻井教授は立派な體軀をビール店に運び、後藤教授は眞面目な顔に度々哄笑を洩し、稻田教授は模擬店に立つたぎり、どこと云ふあてもなく緩歩した。やがて胴上げが各所に始まつた。中山院長、中山學生監、神博士は多數の學生に擁せられて高く押しあげられた。神博士は腸加答兒だからといつ

て逃げるのを無理に捉へて梅之家の模擬店前で胴上げした。

醫科大學創立十週年祝賀の歌

榊 保三郎 作曲
川 邊 杏子 作歌

(一)

袖の湊に千鳥なく

昔をこゝに笠掛の

松よりけふる千代の色

こもる學びの窓の下

學びの末も知らぬ火の

筑紫に集ふ醫伯たち

(二)

闇の扉開く東天紅に

喜び病者幾十萬

四方の里より慕ひ來て

強き苦痛もいつしかに

癒ゆる靈術かづくは

深き學びの賜ぞ

(三)

追山笠の日を追ひて

こゝに十年の春秋を

重松葉の深みぎり

學びの海の末ひろく
さかへ行く日の楽しさよ
祝へもろ人もろ共に

提灯行列

園遊會が終ると同時に大森銅像前は、小、中學校生徒、大學生を以て滿され、門前には大學關係團體がその出て來るのを待ち受けて居た。かくて『祝賀』と紅色に染め出された提灯は高くさし上げられて、銅像前一帶は提灯の海と化した。「萬歳」「萬歳」と云ふ聲は潮のやうに湧いた。やがて六千に餘る群集は小學生徒を先頭にして大正一、二年度卒業生を中に擁し長蛇の如く練り出した。先頭は大學前から掛筋にぬけ、中島橋を渡つたが猶後尾は校門前にあつた。福岡郵便局前から左折して市役所前にさしかゝるや、

待ち受けた市議員連は階上より萬歳を叫んだ。行列も之れに呼應した。縣廳前から、因幡町にぬけて、行列は市の歡迎會場に這入った。

共進會跡の大砂地は四個のアーケ燈に晝をあざむき、此處彼處には炎々篝火がたかれた。午後七時より市主催の祝賀會は開かれた。

九大の發展

大正二年十周年記念祝賀會を舉げる迄は九大も相當に多忙であつた。福岡縣立病院から福岡醫科大學へ、福岡醫科大學から九州帝國大學醫科大學へと成長し、昇格した。此の間は殆んど落ちついて研究も出来なかつた。人間なら發情期とでも云ふべきであらう。然し愈々成年に達して活動期に入つた九大の其の後は實に靜かなものであつた。教授も教室員も黙々として、眞理の追求をなした。大正三年より歐文の大學紀要を出版し

て、萬國の主なる大學、研究所等に配布し、築き上げた九大の業績を逐次發表する事にし、かくて歩一步と研究を進め、學界のために貢獻した。人物も亦年と共に養成された。大正十年九月始めて教授會に於て博士論文の審査をなし、藤原教悅郎、野村正一、鈴木三伯の三名が九大最初の醫學博士として生れ出た。一方教室の増築をなし、精神科皮膚科、小兒科、耳鼻科、産婦人科等の最新式の教室が落成した。尙之れより先基礎方面の各教室も漸次建築され、標本等も年を逐うて増加した。大正十三年始めて入學志願者が定員百名に對し百六十名あり選抜試験を執行した。又患者も遠くは滿洲、臺灣あたりから遙々九大を訪れた。耳鼻咽喉科の久保教授の下には、獨逸からクライデ、ウルフが研究にやつて來た。患者の數は東大より京大より九大が遙に多く、東洋一の觀を呈するにいたつた。

五大醫學會

五四

顧みれば日本の醫學界は大正十年頃から、全く東大、京大、九大の三分野に分たれ、九大は京大を凌いで東大と相對峙するの勢力を張つた。年々の學會毎に九大の活躍は殊に目立つた。かくて大正十四年四月は期せずして、日本内科、外科、神經科、結核科、レントゲン科の五學會が一齊に九大に開かれた。此の五學會を引き受けた時の九大は全く學會準備に忙殺された。かくの如く五學會を一緒に開會する事は全く空前の事であつた。學會は四月一日から一齊に開會されたが、此の日九州は勿論内地の各主なる權威者を始め、遠くは支那滿洲地方からも出席し其の數一萬と註せられた。土地の新聞等は學會記念號をさへ出して紙面の大部分を學會記事で埋めた。

内科學會は福岡市記念館を第一會場に、政友會支部を第二内場にして一日午前九時から開會、神系科學會は一日午前九時から九大精神科講堂に於て、外科學會は博多商業會

議所を第一會場とし、第一公會堂を第二會場として一日から、レントゲン科學會は九大内科講堂に於て、結核科學會は縣立福岡高等女學校講堂に於て同じく一日から二日迄開會した。かくて各學會が開會した四日は、觀光團を組織して、九州一周をなし、行く行く南國の春の情緒を心ゆくばかり味はひ、學會で疲れた頭を休めた。思へば實に盛大な學會であつた。大學は勿論福岡全市が學會氣分に充たされた。斯くの如く五學會を一齊に開くことはおそらく九大絶後の事であらう。

所謂九大事件

九大の前途は遼遠だが、大正十四年八月不幸所謂九大事件なるものが勃發した。我國の各新聞は勿論、ロンドンタイムスにいたる迄が初號活字を以て日々之れを報道した。天下の視聽は九大に集められた。事件は八月から十月迄三ヶ月に亘り、遂に精神科教授

神保三郎、産婦人科教授今淵恒壽、整形外科教授住田正雄の三博士の辭職となつた。事件の批判等は之れをよして、形に現れた當時を簡單に辿つて行く。

五學會を一束に九大に開き大いに學界に九大あるを認めさせてから恰度四ヶ月目である。夏期休暇の真中八月十四日福岡縣刑事課は、十數年來醸された大學前旅館の弊風を革め、大學に來る患者を救濟すべき必要があると先づ旅館石城館から調査を始めた。同日早朝刑事課長山崎警部は福岡地方裁判所検事局の寺島檢事正等と密議を凝らし、同檢事正の指揮により同十時山田警部補は西村判事と共に書記を隨へ、尙福岡署から末吉司法主任等自動車に分乗して石城館にいたり、同家の家宅搜索をなし、證據書類を押收して正午引き上げた。事件は之れをスタートとして進展した。十七日には石城館女將波多野マサが拘引された。明けて十八日石城館女將波多野マサの收監と共に、之れに關係あるものは、全部福岡地方裁判所検事局にて嚴重な取調べを受けた。

十九日午後十一時十分頃突然醫學部小兒科と、産婦科との中間にある講堂より發火し

た。勿論此れが九大事件に關係あるか否かは疑問である。小兒科小原助手と看護婦長が當直室で話して居ると同講堂から火焔が見えたので、すわ火事とばかりに兩名が駆けつけ大事にいたらず消し止めたと云ふ。火は講堂の中央机の下から發したものでらしい。急を聞いて今淵附屬醫院長を始め伊東小兒科教授等が駆けつけた時は既に消止められて、物質的には殆ど損害も蒙らなかつた。二十一日午後三時鈴木福岡縣警察部長、谷田上席檢事等は裁判所樓上に於て密議を凝らし、やがて自動車に分乗して大學通りの加藤尙義博士が經營する加藤内科醫院、右田朋友經營の全天堂、福岡縣糸島郡今津の海濱病院等に向ひ、夫れ／＼家宅搜索をなした。然るに事件は只莫然として輪廓が判らなかつた。二十七日にいたり高山醫學部長は谷田檢事の訪問を受け、二十八日早朝同學部長は眞野總長を訪ひ、其の會談の内容を報告した。同日十二時半輔仁堂の伊藤久治博士は谷田檢事の要求により裁判所に出頭し、種々訊問をうけた。かくて一旦歸宅した伊藤久治博士は二時二十分拘引狀を受け土手町刑務所未決監に收容された。博士は同日付を以て九大

醫學部講師を解囑された。尙同日午後一時半には住田博士邸の家宅捜査となつた。三十日は明治天皇祭であるが此の日榊博士は午前八時に住田博士は午前九時十五分に裁判所に出頭し、訊問を受け午後一時帰宅した。之れと入れ違ひに附屬醫院長今淵博士出頭し同じく寺島検事正から訊問を受け二時間の後帰宅した。其の翌日高山醫學部長は午前六時三十分博多驛發急行で突如上京した。問題があまりに大きくなつたので文部省に詳細なる報告をなし、誤解なからしむるためであつた事は勿論である。同學部長は當局に報告をなし七日歸福し、同日眞野總長に一切を報告した。明けて八日文部省赤間書記官は午前十一時博多着列車で彗星の如く來學した。此の日醫學部では午後一時から教授會が開かれた。一方眞野總長は工學部にいたり赤間書記官と打合せをなし、問題の榊、今淵住田三教授に出頭を求めた。三教授は「かく迄天下を騒がした事は自分の不徳のいたす處である」とて、潔よく辭表を提出した。文部省赤間書記官は此の辭表を握つてその日午後五時發急行で歸京し、三日目に三教授は依願免本官の正式辭令が發表され司法當局

は三博士に對し起訴猶豫を宣告した。かくて二ヶ月間に亙つた九大事件も一段落を告げたのである。

醫學部學生大會

九大醫學部學生四百餘名は九大事件が落着して間もなく同年九月十七日午後三時より精神科講堂に於て學生大會を開き、多事多端な此の秋に際し、學生の結束を固うして、學生としての執るべき態度を聲明すべく、決議及び宣言をした。かくて各學年より五名宛都合二十名の實行委員を選定した。同大會の聲明及び決議は左の通りであつた。

曩に九大事件がやつと納りがついたかと思ふと又久保三宅兩教授の辭職説が傳はり、我々學生は今や學期試験を目前にひかへてゐる時、再び不安に鎖されねばならぬ。かゝる不安がいつ迄も續く事は我が大學の損失であると共に我々學生は實に忍び得ない

事である。我々は此の紛擾をさげ、一刻も早く九大を安定の位置に置かんがため學生大會を開いて、その執るべき態度を決定したのである。大會に於て申し合せた事は

一、九大に對する世間の批評は必ずしも正鵠を得て居ないので我々は新聞記者一同と面會し懇談を交へる事

一、特別診察は全國各帝大及び醫大に於て公然之れを行はれてゐるに拘らず、當局が我が九大のみに特別診察規約を設けんとするものなら、我等は之れに反對する事右二ヶ條を申し合せ、十月十二日學士俱樂部に於て、各委員は新聞記者一同と懇談を交へた。かくて九大事件も略終りを告げた。

農學部及び法文學部創立

醫科大學、工科大學が設置されるや更に一步を進め九州帝國大學に農科大學を増設し

綜合大學の實を擧げる必要ありとて、大正六年頃より福岡縣は又復猛烈なる誘致運動を起し、遂に金百參拾五萬圓を寄附する事に決したので政府も之を基礎として、農科大學を設置する事になり大正七年度より同十二年度にいたる六ヶ年の繼續事業として、大正七年度豫算に創立費を計上し、帝國議會を通過した。

かくて朝鮮總督府勸業模範場技師本田幸介博士及び當時の東大農科大學教授、現東大總長古在由直博士又東大農科大學教授河本鋪太郎博士等が創立委員に擧げられた。

かうして同年四月より直ちに創立準備に着手したが建築材料其他物價は著しく騰貴し當初の豫算では不足を來たしたので、更に政府は大正十年度乃至十三年度に於て八十餘萬圓を増額し完成を期すると共に最初の學部長として本田幸介博士が就任し、大正十年四月より農學科、同十一年四月より農藝化學科及び林學科の講座が開始されるにいたつた。尙法文學部は大正十三年より三ヶ年繼續事業として設置する事になり東大教授美濃部達吉博士が最初の學部長となり大正十四年四月より、授業を開始した。

學士鍋の由來

大正十五年三月十日を以て十三年振りに復興した九大學士鍋は明治四十年十二月九大の前身京大福岡醫科大學の第一回卒業生送別の爲めに催されたものである。此の鍋は第三回卒業生の伊藤吉左衛門が市内の金物屋を漁り廻つて、ヤツト買ひ出したものであるが、此の後醫學部運動場の中央に据え付け豚汁を炊き、式を終ると其のまゝ地中に埋め、又卒業期になると直ぐ掘出しては使用してゐたものである。當時の學士はほんとうに珍らしく、チャホヤされたものである。卒業生が運動場で學士鍋の豚汁をすゝり赤飯を食ひ、四斗樽の鏡を打ち抜いて卒業生萬歳を連呼し、盛んにメートルを擧げながら正門から繰り出すと、そこには市内の各小學校生徒が、手に手に「日の丸」をかざして之れを迎へ、賑々として街から街へと盛んな旗行列をなし市の歡迎會場に臨んだ。かくて

學内は勿論福岡市内は「卒業祝ひ」に老ひも若きも酔つたものである。大正二年の九大創立十周年記念祝賀會の時である。大隈侯も參列して此の學士鍋の豚汁をすゝつた。侯は長崎巡行以來腸を損し當日は發熱し腹痛があつたが、「醫者の中に埋つてゐるから大丈夫だ」と云ひ放つて盛んに此の豚汁を啜りつゝメートルをあげた。この時奥村、林、大野等の學士が豫て用意の墨壺を取り出し鍋蓋に侯の揮毫を請うた。侯は一氣に筆を呵したがその文字は定評のある「天下の針字」であつたことは勿論である。又支那革命家孫文も亦此の學士鍋の洗禮を受けた一人である。此の由緒深い直徑四尺に餘る大きな蓋は今でも學生監室に保存してある。創立當時の文部大臣であつた菊池大麓博士を始め山川健次郎男、眞野文二、伊藤祐彦、高山正雄の各博士の名が連ねられ、各卒業生の署名がある。蓋は今度新調され、支那の書家八十八翁楊草仙によつて劈頭の筆は揮はれた。

大森治豊博士

九州帝國大學は大森治豊博士によつて創設されたものである。福岡市今日の繁榮が、九大の發展に伴つたものであるなら、九大を創設した大森博士は又福岡市の生みの親でもあつた。そのみではない、我國の帝王切開手術を最も早く鮮やかな技倆を以て平氣でやつてのけ、全國の刀圭界の魁となつて、之れを擴ろめたのも我が大森博士である。今日我國の内臓外科手術が著しく進歩して居るのは一に大森博士の努力の資である。博士が明治十二年十二月、福岡醫學學校教師として赴任してから、明治四十五年二月十九日最後の息を引きとる迄の全生涯は全く「九大創設」と、「學界の進歩」のために捧げられたものである。

◇

東京市神田三河町に、頗る豪邁活達な「快春」と呼ぶ醫者があつた。醫業にかけては實に入神の技を有し、名聲噴々たるものがあつたので、三度將軍家から召かれたが、何か不満の點があつたので應じなかつた。そして此處で開業して居たが、前後十一回の火災に罹つて、家財をすつかり焼失した事も數回あつた。それでも上手な醫者丈けあつて患者は日毎、夜毎に踵を接した。晩年になつて上の山藩の侍醫となり傍ら開業し、將軍家の召しに應じなかつたと云ふ意味の印を刻して藥局の章とした。診察所には常に、上と下とに酒樽を置いて、上のは紳士に、下のは洗足はだしの藥取り等に、勝手に飲ましたものである。

嘉永五年の十一月十日である。此の家には一人の男の子が呱呱の聲をあげた。賢こさうな、丈夫らしい始めての子を、快春と妻とはつくづく喜んで見入つた。そして名を金十郎と呼んだ。金十郎はそれはく腕白で酒好きの子供であつたが、長ずるに及んで神童と云はれる程賢くなつた。十五歳にして門生十數人を集め傷寒論の講義をして、父親

を驚かした。或時藩から秀才を選抜して東京に遊學させたことがあつたが、此の金十郎は「彼の如き飲酒家は到底先の見込みがない」と云ふので其の選に洩れた。

茲に於て此の金十郎は大いに憤激し、同年金二貫文を携へて東上し大學東校に入り、孜孜として苦學した。元來秀才の彼は理科試験に於て斬然頭角を現はし、首席を占めた。之れに反して同藩の選拔生は或は落第し、或は遙かに席次が彼より下位であつた。當時の舎長であつた石黒忠恵は彼の無學資と苦學を憫み、藩から學資を支給させやうとしたが、彼は嚴然として辭退した。かくて彼は醫科全書等を翻譯したり等して學資を得孜孜として苦學を續けたものである。遂に明治十二年優等を以て大學東校を卒業した。此の人こそ九大の創立者大森治豊博士である。博士の學生時代はかうして一方に於ては秀才であつたが其の半面には又放縱にして暴飲に耽る事も屢々あつた。彼の風彩は頗る上らず、他の學生は全部髪を分けて居たが「頭を軽く清潔に保持せねば勉強が出来ぬ」と云つて彼のみは、いつもクリクリ坊主になつて濟まして居た。友達と共に青樓に登つ

ては盛んに酒を飲んだものだが、彼は只チビリ／＼飲むばかりで何等の藝も知らず、只調子はすれに「彌生の花見は上野か向島繚客は『ホロエイ』機嫌で、瓢箪『プーラブラ』と、よく此の都々逸ばかりを歌つて居たものである。

或日曜日の晩である。例の如く神田の花見樓の奥座敷で豪飲の末、彼は出格子に腰掛けて居たが、過つて二丈餘の絶壁から墜落した。之れを見た友人の驚愕は一方ではなかつたが、小男の彼は恰も小兒の如く石垣の下の草叢の中に轉び込んで居た。暫らくして自ら起き上り階上に向つて「大森は無事だ」と高く叫んだ。一同安心の胸を撫下して彼の上つて來るのを待ち「大森の奴、何處までも運のいゝ奴だ」と云ひ合つては更に又祝宴を催したと云ふ。

◇

彼が大學東校を卒業してから間もなくである。當時の福岡縣令渡邊清は大學卒業生十八名中から、大森治豊、熊谷玄旦の新らしい學士を一緒に福岡に聘しようと大學に交渉

した。當時學士は非常に珍らしく一縣に一人さへも居ない位であつたが、此れを聞いた大森さんは

『どうだ熊谷、一縣で二人も一緒に招聘しようと云ふ位の縣だから随分有望だ、一番行つて見ようぢやないか』

『うむ、よからう、行く事にしよう』

と話は直ぐ纏つた。大森は卒業後直ぐ元の大學東校長前田元温氏長女タカ子を妻に貰つて居たので、此の新妻と相携へて明治十二年の冬福岡に赴任した。

當時の福岡醫學校は創立日尙淺く微々として振はなかつた。大森博士は大河内和、熊谷玄旦の兩氏と共に一致協力大いに刷新に努め、面目を改めたので、爾來校名頗に揚り笈を負うて來學するものが漸次多くなつた。

博士の講義は言語の濫吃と、音聲の低いために生徒は大いに困難を感じた。當時は參考書とても殆んど無く、講義筆記を以て唯一の教科書として居たが、博士の講義が斯く

の如くてあつたから、生徒は後で數人集合して漸く完璧に近い筆記を作り上げ、各自之れを寫し取つたものである。

博士は又どんな遠い病家にも表紙のすり切れた奉加帳を腰にブラ下げてテクテクと往診したものである。診察料を贈る者があれば、此の奉加帳に記入させ、明治二十七年福岡病院が千代の松原に改築されるにあたり曩の奉加帳の金額を集めて、其の建築費に加へ、模範病院を建築した程だから、如何に博士が大學創設に熱心であつたかゞ判る。

菊池文部大臣の時である。大臣官邸の大玄關に或日『大臣は居られるか』と、とても素的な服装をした、あばた顔の小男が現はれた。朝鮮服でもない、洋服でもない、和服でもない變挺な詰襟。先皮さぶがわだけ打つけた異様な下駄。玄關子は直ぐ『今日は不在です』と玄關拂ひを喰はした。すると一葉の名刺を渡して立ち去らうとする時、大臣は大急ぎで玄關に現はれ、此の異様な小男に玄關子の輕卒を謝した。此の人こそ我が崇拜する大森治豊博士其の人である。異様な着物は、『洋服はズボンが窮屈で、和服は活動に困る』

と和洋折衷をやつた大森服である。異様な下駄は又「靴は衛生に悪いし、穿くの面倒だ、さりとて下駄も亦靴下では全く穿かれぬ」と、臺に先皮さかかわだけ打つつけた至極便利な大森下駄である。下駄は今も尙九大に傳はり、看護婦も穿き、教授も穿き、總長もつ、かける。大森さんは此の異様な服を着、異様な下駄をつ、かけて研究もやつた、往診もした。文部省へも出頭した。大森式は未だある。九大千餘の看護婦は皆スコッチの黒い厚い足袋ともつかぬ、靴下でもない、素的な足袋を穿く、「病む人は靜肅が第一の藥だ」と、これも又自ら考案した大森足袋である。

學者としての博士は又全く國粹的學者であつた。例へば植皮術に際し、保護被として湯葉ゆはを應用した如き、又水飴を以て新膏劑を案出したる如き、又手の消毒に「フクミン」溶液と殺菌した河砂を以てしたが如き、總てが日本的であり、國粹的であつた。其の他土間の色を赤くし手術後の血を目立たなくしたが如きも亦大森式の一つである。しかし博士を有名にしたのは、當時外科學の進歩に先ちて、種々の困難な手術を決行し、好成

績を収めた故である。例へば帝王切開術、放線狀菌病の手術、胃癌の手術二百十三例、膽石手術七十例、其の他卵巢囊腫手術百例、腹膜炎の外科的所置等の如きは日本に於て嶄新なる手術にして、卒先して之れを行ひ多數の實例を擧げ當時の學界を驚かせた。かくて全國から「腹割りの大森さん」と患者が日々踵を接して、博士のメスの前には何人も尊い生命を預けたものである。

博士は又明治二十三年玄洋醫會を起して學術的會合を始め、又「杏林の葉」なる月刊雑誌を發行し斯界の進歩に努めた。又地方巡回教授の制を定め當時の福岡醫學校教員をして輪次縣下を巡回させ、所在臨床講義を開かせた。福岡縣下の醫師が一般に今日進歩してゐるのも博士の努力の賜である。

明治三十六年九大の前身京都帝國大學福岡醫科大學が、福岡病院を基礎として、設置せらるゝに及んで、博士は教授に任ぜられ自ら最初の學長となり、附屬醫院長の職を兼ねた。博士の素志たる大學設立は遂に事實として現はれた。第一回の學長として重大な

る任務を帯び、内外設備の完成に努めたが、やがて腦を患ひ、同四十二年十二月二十三日遂に其の職を辭した。福岡醫學校に赴任以來實に三十年精勵一日の如く、辭職に際し特旨を以て従四位勳四等に叙せられた。

間もなく明治四十三年三月十三日、大學運場に式場を設けて舊新學長送迎の會合が催された。博士は靜かに病軀を壇上に運び、云はんとして言なく遂に熱淚滂沱として博士の兩頬に下つた。滿場寂として聲を呑み一人の仰ぎ見るものもなかつた。博士の素志たる大學成りて設備之れより漸く完成せんとする時、突然として校門を去る博士の胸中は無限の感があつたと共に、送る者も亦感慨無量であつた。かくて身を閑散の地に置き、園花卉を賞し風月を友として靜かに晩年を送つた。同年五月門弟友人等發企して博士の學徳を永く景仰せんため銅像を大學内に建設した。博士も亦其の除幕の式に臨んだが後藤元之助學長靜に幕を撤するや、書籍を左手にした、フロック姿の立像は初夏の日光を浴びて輝いた。拍手の音は千代の松原に響き渡つた。

かくて博士の老ひの兩眼には感激の涙が光り、夫人はハンカチを以て又せきあへぬ涙をふいた。博士はやがて病軀を夫人に輔けられて壇に進んだが、又聲なく、只感謝の意を表したのみであつた。後九州帝國大學名譽教授となつた。

明治四十五年二月十九日である。千代の松原は稀なる大雪に埋れ、天地は銀世界に化した。我が九州帝國大學の創立者として、我國内臓外科學界の開拓者として、其の名は永久に輝く大森治豊博士は此の日午前二時、大學諸教授親族の人々始め其の他多くの友人門弟の手に擁せられつゝ、長逝した。享年六十一、博士が福岡に赴任してから實に三十三年目である。此の報天聽に達するや、畏くも特旨を以て旭日小綬章を賜はり、又葬儀に際し、祭祀料六百圓を下賜せられ、勅使參向幣帛を賜はつた。かくて崇福寺老松の下美しく淨められた處に、九大の恩師、大森博士は永眠の床をとつたのである。

故大森博士逸話

博士が明治十二年福岡縣に招聘せられてから孜々營々、醫學校の完成を期したが明治二十一年森文部大臣の時、縣立醫學校なるものが全廢され全國五ヶ所に高等中學醫學校を置く事になつた。自然博士の主宰する我福岡醫學校も廢止の運命に逢着した、爲めに博士は不本意ながら單に一治療病院長たるに甘んぜざるを得なくなつた。此の頃長崎、岡山等から禮を厚うして屢々博士を招聘しようとしたが、苟くも福岡に一諾を與へて赴任した以上決して他の好餌に耳をかたむけず、且は福岡縣を以て最初から大いに爲すあの地として擇んで居たので頑として應ぜなかつた。

後明治三十六年に至つて從來の縣立病院は、ついに福岡醫科大學となり、博士自から其の學長の榮位に就くに及んで博士の素志は達せられ、博士をして先見の明を得させ

た。博士は其後竊に昵近の者に向つて

「自分が福岡縣に來て以來知事も變り警部長（縣立病院は警部長の直屬であつた）も幾度か變り、縣會議員も屢々改選したが、自分に對する同情は終始一貫していたので幸に今日あるを得たのだ」と、始めて福岡縣に感謝の意を漏らしたと云ふことである。要するに博士は福岡縣を知り、縣も亦博士を知り、互に知己相俟つて今日の九州帝國大學を生み出したのである。

◇

大學病院が未だ縣立と稱して居た頃の事である、某宮殿下の座乗せらるゝ帝國軍艦出雲は博多の沖に艇船した。是より先、同艦に突然霍扶斯患者が発生して直ちに佐世保の海軍病院へ移したが、間もなく又一人の發熱患者が出來たので福岡病院へ連れ込んで來た。然るに當時の病院には未だ傳染病患者を收容すべき設備が出來て居なかつたので、博士は自から電話口に立つて市役所に交渉し、市の避病院に入れる様に相談した。處が

市の方では容易に其の相談に應じない、已むなく醫員の一人を同艦付某軍醫と同行させ市に直接談判を始めたが、市は尙應ぜず、目下軍艦は早良郡の沖に碇泊して居るから同郡に交渉してくれとつきはなした。軍醫は怒つて更に縣に交渉すると縣では某警部が市に電話で又交渉した。彼は最初から四五時間も費してやつとの事で市の承諾を得た。博士は此時始めて怒つて市を罵つたさうである。

◇

今の千代の松原に移轉せぬ前の福岡病院改築の折、博士は二十八萬八千圓の豫算を作り用材の寸法に至るまで自分で見積つて縣會に提出した。而して議場で説明する時に『改築の理由に就ては議員諸君が醫學校を卒業せねば解らぬから説明せぬ』とあつさり片附けて議員を笑はせたが、滿場一致を以て可決した。

◇

博士は毎朝必ず五時に起き午前七時前後にかけて出勤するのを例として居た。其の上

日曜も祭日も嘗て休んだ事がなく、一年三百六十五日病院を以て家とし、自邸を別荘の如くして居た觀があつた。殊に患者の病氣の経過に依つては自から宿直迄して居たのである。或日曜日、博士は東京から歸途直ちに病院に立寄つたが宿直の外醫員は一人も出勤してゐなかつた。博士は不審さうにあちこちを見廻つたが、一人も居ないので看護婦にたゞすと『先生今日は日曜です』と云ふ。博士は腑に落ちぬらしく妙な顔をし、博多言葉丸出して『何ごと日曜に休むぢやらうかい……』

◇

明治三十年頃の或夜博士邸に泥棒が這入り衣類から身廻一切を竊取した。日曜祭日にも缺勤しない博士も裸では出られず、遂に一日だけ缺勤した。翌朝或人が『先生のお宅には泥棒が入りましたそうでお氣の毒に堪えません』と挨拶すると急ぎ足に監理室（今の事務室）への階段を昇りつゝ『品物があつて油斷したけん取られたと、最早言はんと言はんと』と、倉皇として逃げて行つた。

或年坂田看護婦取締が「先生今年は夏期休暇を下さると云ふ事ですが、期日は凡そ何日頃ですか」と問ふた。

「休暇を取つて何うするな」

「郷里へ歸ります」

「歸つて何うするな」

「歸つて遊んで樂みます」

「遊んで何が樂みな、人間と云ふ者は晝夜間斷なく職務に勤勉してこそ樂みだのに、休んで樂みとは何う云ふ譯かいなア」

と眞面目に反問したと云ふ。

博士が時間を惜んだのは有名な話で、回診の時病棟から次の病棟に行くには、幾分間掛る、此間に書物を読めば幾行、一年には幾行、更に何年間には何冊読めると言つて常

に書物を手離した事なく、病院に往復の上でも曾て無駄な時間を費さない。従つて手術の際、針に糸を繋ぐ時間が一分遅れても小言を言つて居た。それで澤山の針に糸を通し、針に錆の附かない様にオレツ油の罐に入れ、消毒して豫て充分に用意してゐたものである。「一寸の光陰輕すべからず」は全く博士生涯の座右の銘であつた。博士の博識も蓋し此のためである。

博士の乗用の車夫は何時も一定の速力を以て走ると云ふ特種の技能を有して居らねばならなかつた。其れは速力が一定しなければ車上で讀書が出来ないからである。其れに就いて博士は

『急に走つたり、緩くり歩いたりしては結局中位の速力で走ると同じだから始終一定の速度でゆつくり歩いた方が讀書が出来るだけ得だ』と云つて居た。

是も亦時間を惜む結果だが博士の書簡は頗る簡潔な書方で、長上に對するものは必ず

しもさうでないが、同輩若くば門下生等に對する返信などは「應」「諾」「不能」「然矣」等の單語を認め、末尾に豊の字を崩した華押を書くのが例であつた。或は又、先方の書簡を其儘に使用し、先方の言句を取り末尾に意見を附し、發信者の名前の下に「殿」とか「様」とか一字を加へて上げ印を附し自分の名前の下にある敬語を消して下げ印を附し門下生や部下の醫員などに送つてゐた。博士に對し急に返書を得たい場合には

『斯々の問題は如何』

と問はず

(一) 斯々の問題は斯々しては如何

(二) 若し不可ならば……………

と云つた調子で一々此方から案を具し、先方では唯可否を裁決するのみでいい様に各項の行間を一行位宛あけて置き、返信用状袋には豫め宛名を認め切手迄貼用して封入して置くと、博士は車中からでも何處からでも、直ぐ返事を出したものである。

又博士が數日留守をして歸つた時机上に堆積した各地からの書簡を読む時には、先づ豫め左右の者に豫見させ、『一筆啓上』とか『春暖の候』とかの閑文字は一切消して、唯必要な所や返信要否の所のみを朱點をつけさせ、そこ丈けをサツサと読んで行つたものである。

◇

博士は物を考案する事が大好で、何か新しい問題が起ると必ず醫員や看護婦に答案を求めた。そして其の考案が良いと『成程頭でなしたナ』と何時も大に満足してゐた。

『頭で働け』

とは博士が常に部下に云つた言葉である。院内回診の際患者の枕許に珍らしい菓子でもあると、挨拶もなく一寸一つ失敬したものである。玩具なご物珍しい物があると頻りに弄び遂に壊して了つてゐた。之れが一場の無邪氣な惡戯かと思ふと、中々そうでは無い。やがて何病棟の何といふ患者が持つてゐた玩具は、こんな風に作つてあつたが彼れ

を此處に應用したらなぞと既に研究してゐた。博士の目に觸れる物一個の玩具でも猶且學術研究の用に供して居たのである。

寒い寒い或日の朝である。博士は午前四時頃病院に出勤した。看護婦は不審に思つて

『今頃こんな用事でお出になりました……』

と聞くと、博士は例の口調で

『冬の夜勤は何の位辛いか試して見たのぢや、イヤ中々寒い、だが皆良く働いて居る』
此の時以來今も用ゐられてゐる防寒衣が出来たのであつた。

博士は醫學用品は成可く内國品を利用する事に注意した。植皮術に從來護膜を用ひたのを種々研究の末、終に精進料理に用ゐるゆばを代用する法を發見した。又絆創膏を貼る代りに、水飴を里斯林と亞鉛花とに抱合して、紙繻帶を造つたなども其一例である。

博士は或時門下生數名と會合して居たが偶々所持の葉巻を喫み盡し

『口』一本呉れ』

と云つて其の巻煙草を貰つてスバ／＼と燻べて居た、それはカメラヤであつたので博士が笑ふ度毎に、火先がバラバラ博士の膝の上に落ちかゝる。傍に居た門下生は氣の毒に思ひ

『先生これはカメラヤといふ粉煙草ですから御注意なさらねば股引が焼けます』

『ハアそうか、成程之は一つの新智識を得た』
と喜んだ。

博士に一つの失敗話がある。それは渡川用の深長靴の新工風であつた。博士は例の間尊重の點から、福岡の須崎から博多に近路する爲め屢々那珂川の下流を徒渉して居た

その都度足袋や靴を脱ぐのが臆劫なので、終に大發明でもした積りで股に達する大長靴を新調した。處が元來丈の短い博士は、兩股の分岐點迄、長靴が達してゐても、尙間に合はない程度に深かつたので、折角新發明の靴の中に水が瀧の如く流れこむので大に閉口したといふ事である。(當時の那珂川口は今より淺かつたのである)

博士は嘗て知事の私邸を訪はず、又その轉任新任の時でも決して禮をとらなかつた。人或は之れを以て博士を不遜とし、又は豪放とも評したが、實に誤つた觀察である。蓋し博士は病者の救治を以て天職と心得て居たので、區々たる長官の送迎や伺候なきに頓着して居る餘裕は無いと話して居たからである。

嘗て明治二十三年の頃、博士は縣内を巡廻して大牟田に行つた事があつた。同地の人々は炭坑の坑内を見せ度いと、頻りに入坑をすゝめた。しかし博士は遂に入坑しなかつ

た。歸院の後或人が

『先生定めし、坑内にお這入りになりましたらう』

と問へば、博士は頭を横に振つて

『馬鹿な、あんな處に這入るもんか、萬一の事があつたら大變だ、澤山な人を助けにやならぬ身ぢや、さう迂濶に死なないよ』

その時炭坑への往來、博士は道傍で何やら頻りに拾つて居るので、隨伴者は不審に思ひ『先生何をなさるのです』

と問ふと、茶碗の破片や古針や硝子片を兩掌に一杯のせたのを見せて

『跣足で歩くから、澤山の人が傷でもしたらいけない……』

と眞面目な顔して答へた。

博士が嘗て熱心に胃痛を研究して居た時、縣内外各地の開業醫に續々該患者を病院に

送る様に通知し、来た患者は博士自ら診療に當ることゝして居た。當時某患者は、博士が終始、枕頭を離れず、屢々夜伽までして自ら助手か看護婦のする仕事迄も叮嚀に親切にして居たのでその温情に感謝して居たが、死の一刹那を過ぎると慈父の如かりし博士は忽ち冷然と

『之でお仕舞だ』

と云つた様な恰も土偶のやうな顔をしてサツサと病室を立去つた。その叮嚀親切は人に對して爲すのでなく、病に對して爲すのであつて、如何に學術に忠實であつたかが知られる。

◇

博士の診察は飽まで病氣本位で、患者の貧富や官位などを見て待遇を異にする様な事はなかつた。或時特等の痔疾患者が大型の名刺を差出し、私は斯々の者であるから何卒特に御診察を願ふと言ふと博士はこの名刺に一瞥を與へたのみ、何の返事もなく其の儘

行つて了つた。患者に對して特別も普通も私費も官費も區別はないのである。それでも博士は病氣そのものを考へたと見え心配さうに獨語した。

『アリア上海の郵便局長ぢや、何うあるぢやらうかい』

◇

博士が部下の職務擔任を命ずる際は、殆んど傍若無人何の顧慮する所もなく、その人の手腕に基き假令新參の者にでも随分思切つた晴れの役を與へる、又古參であり相當の地位にあつても、其手腕を否と認むれば餘所の見る目も氣の毒なやうな雜務を取らせて平氣で居た。眞に適材適所主義の實行者であつた。

◇

三十六年三月末、この四月から、縣立病院が大學病院にならうと云ふ瀬戸際になつて某看護長排斥運動が院内看護婦の間に勃發し、四百五十名が連判狀を造つて監督の下に手交し院長に提出方を依頼した。監督は已むなく之れを博士に示した。博士は暫らく

考へて

八八

『よし、多人數と一人とは代へられぬ、俺に相當の考があるから左様して置け』と連判狀の人數だけ聞き、連判狀には手もふれずにそのまゝ監督に返した。かゝる事に個人の姓名を記憶するのは、却つて將來何かの障害だとの考へだからである。博士の人を賞罰するには些の私心なく光風霽月の概がある。其後四月の新年度からいよく大學病院となつたが、例の看護長には新らしい辭令は來なかつた。色々哀願もし、辯解も試みたが、博士は一切を知らざる者の如く

『此大學には不適當の人と思つたから俺が斯様に取計つた』と、全然一身にその責を負つた。

◇
縣立病院時代、某縣から來た醫員が、前任地の書店に支拂未済があつたので、書留端書で院長宛に督促して來た。固より他人のことで、特に前任地に於ての事だから博士は

何の關係もないのであるが、今は既に自分の部下であり、自分の名も出てゐるので、博士は請求金額をその醫員に與へて直ぐ支拂はせた。

その後大學と成つてからも大學の名義で書籍を取り、現品が何處へ行つたか判らなくなつたなど云ふ時には何時も博士が自腹を切つて、知らぬ顔して居たものである。

◇
博士が一番嫌なのは目に見へぬ埃であつた。鷹揚で無頓着な博士も此の埃には一生を通じて随分苦勞したものである、博士が椅子を誂える時は中々注文が難かしい。第一にトボンと落ち込む様にする。次に之を張つた天鵝絨は中締やボタン止めなどをしなければならぬのである。かうしないとその中に埃が潜むからである。大森家の召使は『毎朝の雑巾掛で骨が折れます』

とこぼして居た、成程同家には三種の雑巾があつて、先ず最初に荒雑巾、次に中雑巾、最後に仕上雑巾、その仕上雑巾には少しも埃の染まないうまに綺麗に拭かねば博士の氣

八九

には叶はなかつた。

下婢が午食のしちりんの餘り火で早手廻しに夕食の野菜など水煮して居るのを見つけでもしやうものなら忽ち霹靂一聲大變に叱つたものであつた。博士は其の時食ふ物は必ずその時煮るといふ主義で、之れが又大森家の家法でもあつた。そして残肴は必ずその都度捨てさせてしまふ。その時下婢が

『勿體ない私が此次に載きます』

とでもいはうものなら、大變である。

『馬鹿な事を云へ、俺の生命でも貴様の生命でも生命に區別があるか、他家で食つて來たら知らず、俺の家では俺の喰はない物は唯でも食ふ事はならぬ』

と嚴命したものである、新に來た下婢なごが此家法を知らないで夕食の残り物を翌朝出したら、博士一流の疳癩は忽ち發して、食物は云ふに及ばず、容器も共に垣の外迄投飛ばされたものだ。

福岡地方の習慣として、盆前には平生出入して居る家に乾し鰯を進物にするが、博士はその臺所に堆積した乾し鰯を片つ端から、自分で裏の海中に投げ込んだものである。すると下婢は餘り勿體ないと云つて、密かに近所の者に知らせて之れを拾はして居たと云ふ。衛生を重んずるとは云へ、博士の經濟に無頓着であつたのは總て此調子であつた。

博士の潔癖は有名だが、博士が須崎裏町に引越すまで僅に數年間に七回轉宅した。採光、通風、水質、下水等の衛生上の不完備が主なる理由である。そして移轉する毎に必ず疊を替へ、井戸端其他漆喰を仕換へ壁を塗換へる。又間もなく移轉するので其置土産の多大なるを喜ぶ家主に引き換て『惜しい事だ』と悔む者は夫人や下婢であつた。

◇

博士の眞の嫌な物のもう一つは御飯の中に砂粒の交つてゐることであつた。食事中萬一砂の一粒でも齒に觸つたら其こそ實に大變、飯櫃中の飯は忽ち全く轉覆されて裏の海中に投り込まれる。それで博士の家の米は極上の優等白米で而も特に一粒撰りをしたの

であつた。博士に對して殊に恩義ある人などで折々一粒撰りの白米を俵にして贈つた者さへあつた位である。

◇

人に對して愛憎はなかつたが唯だ嘘を云ふ者ばかりは大々的の嫌いであつた。而もその嘘言たるや、必ずしも悪意から出た嘘でなく、唯だ方便として、用ひた嘘であつたにしても、苟も一旦嘘を云へばその人は最早博士に對して、全く信用を失なつた者である。

その代り一旦信用した以上、徹頭徹尾信頼したものである。之れは唯、人に對してのみでなく、物品に對しても矢張りその通りで、例へば酒は『白雪』煙草は『菊世界』と、一旦信用した以上は、假令より以上の品が目前に出されても手を出さず自分の愛用するそれではなくてはならなかつた。出張又は宴會などに行くにも、何時もその酒を携帯して居たものである。嘗て長崎の醫學專門學校長大谷博士を訪ひ、馳走になつた時、肴

は先方の品で酒は態々福岡から携へて行つた例の『白雪』を、主人の面前で平氣でチビリ、チビリ飲んだなど云ふ事は當時一話柄となつて居た。

◇

博士の雷鳴嫌ひときたら又有名なもので、少しでもゴロゴロ鳴つたら忽ち電燈も何もない室の真中に轉び込んだ。或日手術の最中に雷が鳴り出した、博士は手をやめて

『避雷針から此處迄何の位の距離があるか、大丈夫か、大丈夫か』と氣遣つて矢鱈に念を押したと云ふ。

先夫人の代から前後一ケ年間も博士の家に奉公して居た八十一歳の老婆が須崎裏の博士邸の隣家に居たがその婆は『生先の疝瘕は甚しいもので、新しい下駄なご買つて來てお穿きなさる時、少し鼻緒が詰つてもゐると忽ち附近の川の中と云はず、堀と云はず投げ込んでお仕舞になつたものです。お酒の時など、少しお氣に召さぬ事でもあると、麥酒の壺なごガラ／＼／＼二階の梯子から轉がりますので、それは／＼怖いことだし

た。併しお心持が極めてさつぱりしたお方で、後では何の事はありませんから、誰も辛棒が出来たものです』

と云つて居た。併し博士の疝癪は追々年と共にその程度を減じて来て、最初は行爲の上に現はして居たのが、追々口先のみとなり、後には又顔色位に止められる様に迄成つて居た。

斯く博士はよく疝癪を起してゐたが最も猛烈なのは手術が自分の意に満たなかつた時であつた。外科手術を施して自分の失策か、或は自然の成行として、不満な結果を得た時は憤々八ツ當りに當り散らしたものである。そして矢鱈に書物を齟齬した。この時人が言葉でもかけると大喝叱り飛ばす。しかし著書若くは新聞雜誌等の中で自分と同一の失策を演じた人の實例を發見した時始めて釋然と微笑したものである。

博士は疝癪の反面には極めて優しい所があつた。例の八十一歳の婆さんは博士の逝去

後斯う語つて老の目に涙を湛へてゐた。

『先生は大變御親切な方で、私など永らくお世話になつて居ましたが、近年御發病後も始終御召になりお膳の御相伴なご仰せ付かつて居ました。昨年五月私が病氣をして溝口病院にお世話になつて居ました時など、態々先生が御自身でお見舞下さいましたり、三度々の食事なども毎度先生と同様の品物を持たせて遣つて下さいましたのです。今度お逝くなりになります少し前にも、私が轉んで身體を痛めて居るといふ事をお聞きになつて、婆が轉んだ相だが何處を打つたらうか、なき噂して下さつたさうです。

東京に博士を九歳迄育てたお銀といふお婆さんが居た。養育の恩は年を経ても忘れず上京する度毎に必ず博士は此のお銀婆さんの家に一晚泊り、又一晩は旅館に招き、面白い物語をする事を何よりの樂みとして居た。

明治三十六七年の頃であつた。公用で京都大學に行き、夜行で吉塚驛に下車し、直ち

に大學に行つたが、門は鎖され、守衛は眠つて居る。元來大學病院の規定として如何なる深夜でも、用事で来る者には必ず開門して引接すべき掟である。その爲め不寢番を置いてある筈であるに拘らず、此の始末であつたが、博士は其の無責任を敢て咎めもせず、又自分の名前も云はず、唯態々辭を低うして開門を頼んだ。守衛は不精無精門を開くと、大森學長その人なので、彼は平身低頭罪を謝したが、博士は顧みもせずサツサと奥へ行つて了つた。翌日守衛は始終心配して居たが終に何の沙汰もなかつた。

◇

看護婦に品位を保たせると云ふ事は、常に博士の念頭を離れなかつた問題であるだけ看護婦養成問題は常にその話題にされ、またその教育は頗る嚴肅であつた。或日手術室の附屬室で看護婦達が何か食べて居る處に、博士が偶然這入つて來たから、一同恐縮して居ると、博士は直ぐフイと室を出た。そして手術室の方に残つて居る連中に

『そんな事をして馬鹿な』

と一人の頭を扇でポカンと一つ打つたが、直ぐ

『コリア人の子を叩いて相濟みませんハハ……』

と無邪氣に笑つたので叩かれた者も悲しさ恥しさが何時しか消へて了つた。

◇

博士の口癖に『地球の表面』と云ふ言葉がある。それは『世界』を意味する事になつてゐた。例へば『そんな事は地球表面に於てなり得ない事だ』と云ふのである。而して博士の説明によると吾人が常に世界々と云ふ事は人間世界を意味するので人間は地球の表面にしか住んで居ない。吾人が言ふ所は單に地球の表面に於て云々するので空中や地下の事を云ふのではない、と云ふのである。博士は亦時々『地球の中心から遠ざける』とか、『地球の中心に近づける』とか云ふ事を云つたが、是は主に患者の體を横たへて手術などする時、上下の區別が、人體の上下だか、地球上の上下だか判然しない時など

に用ひたのである。

又人と相談する時は始終「何故」と反問し、次で「例へば？」と追窮するのが癖であつて、如何なる妙計奇策でも此二種の關門に行き惱んで答辯に躊躇して居ると早速「駄目だ」と排斥し、之に反して先づ中計中策か若くは稍拙策に近い方でも此難關を輕妙に切り抜ければ御機嫌殊の外で「ウム可矣々々」とやつたものである。それで此呼吸を呑み込んで居る博士の部下は、何か建策とか、出願とか云ふ時には豫め此の難關に對する用意を怠ら無かつたものである。

縣立病院内科部長の熊谷玄日博士が洋行中、突然意表外な訓示が出た、其は「自今寄生蟲病を除く消化器病は一切外科に屬せしむる者とす」と云ふのである、蓋し博士の眞意は、消化器病で外科的手術を要する者は一應内科の診察を経て後外科に廻すと云ふ順序を省略して直ちに外科に取らうと云ふのであつたが、此の不合理なる訓示を一讀した醫員の面々驚くまい事か、中にも部下の某は早速博士に肉薄して

「先生こんな事は理論上とても出来ませんよ」

とやると言下に例の

「何ぜ」

と來た。博士の口吻を學んで

「でも地球表面に誰も斯んな不合理な事を承認する者はありませんまい」

と云ふ

「人が承認せなくつても俺の病院に俺が遣るのだから可いぢやないか」

「でも先生早速お困りになる事がありますよ」

「ナニ困るツて？……例へば」

「例へば窒扶斯とか腸結核とか赤痢とか云ふ様な到底外科に關係のない患者が熱が出たとか下痢するとか云つて來たらどうしますか、外科では閉口するぢやありませんか」

一二個の難關を無事に通過したので博士も成程と思つたか

『では何うするか訓示は取消すのかね』

『今朝出したばかりの訓示をもう取消すのも變ですから、先生熊谷部長の不在中内科を兼任なさつては何うですか、すると内科も、外科も皆先生の所にやつて來ることになりますから結局先生のお目的も達せられるでしょう』

と云ふと博士忽ち手を拍つて

『よし然うしよう』

と、匆々車を命じて縣廳に出頭し、内科兼任の辭令を握つて來て辭令の發表と共に前の訓示を取消し、此の制度を押し通すこと一年有餘、熊谷博士の歸任と共に再び昔に歸したのである。

明治三十八年頃博士夫人は腎臓病で自邸の二階に就褥した。枕頭には博士及び實子與是夫、養子丙、醫師看護婦等が看護して居た。恰も夏期海風を入れる爲め北面の硝子障子を開いてあつたが、誰やら海岸に塵埃を始めたのでその煙が遠慮なく二階の病

室に入つて來た。側に居た一人は忽ち一喝を試みたが先方も頗る強硬で、却つて反對に理屈を言つてゐる、短氣の博士は堪へ兼ねてコト／＼階段を上つて海岸へ出かけた。

塵埃焼きは市衛生巡視の服を着けて居たが、博士が未だ一語をも發せぬに、彼は早くも機先を制して、

『我輩は公等の爲めに衛生を重じて、不潔物を焼き棄てるのである。貴公は醫師でありながら、公衆衛生を重ぜず斯様な處に塵埃を掃き棄てると云ふのは不都合千萬ではなからうか』

と堂々と遣り出した。博士の庭園から掃き出した跡が歴然と見へて居る。博士は黙つて聽いて居たが終に一語も發せず其儘テク／＼として退却し二階に上つて看護婦を呼び「ツチ（看護婦の名）や障子を締めろツ』

博士の常用服は一種變つた。肌に着著しない所謂ダブ／＼式の詰襟服で、そのズボンなども目立ちて大きく、著るにも脱ぐにも容易なように仕立てたものであつた。肌著は

必ず柔かな木綿物で、莫大小や毛織の物を用ゐることは決してなかつた。木綿は洗濯に便利がよくて、且價が安いから古くなれば直ぐ新調するに困らないと云ふのである。そして特に極寒の頃になると其木綿の下著の上に眞綿入などを著てゐたものである。

博士は大抵の所には此の常用服に所謂大森下駄といふ妙な突掛け下駄を穿いて出掛けた。或時儀式上是非燕尾服で無くてはならない事があつた。博士は已むなく服屋を呼んで寸法を取らせ

『柄は何でもよし、品もみんな下等でも構はないから二十圓の物を製つて来てくれ』と云つたのは服屋も呆氣に取られた。

博士は風采が甚だ揚がらなかつた爲め、いつも人に間違へられて居た。今水茶屋に開業して居る麻生學士が中津病院長をして居た頃である。丁度博士が豊前築上郡八屋町へ巡回して行くと云ふので、特に麻生は中津の一等旅館に宿を選定し、最上の室を掃除し總て準備をと、のへてあつた。處が例の風采をして來た博士を忽ち女中が最下等の一室

に投り込んだ。博士は名乗りもせず、苦情も云はず座つてゐると聽て麻生學士が尋ねて來て、この態を見て驚き宿の主人をさかんに吐つたものである。

外來患者が博士の診察を受けながら『折角遠方から大森先生に見て頂き度い許りで來ましたから、何うか其の手續をお願いします』

と不足らしく訴へる事が屢々あつた、博士は

『今に先生が見て下さるよ』

といつても微笑してゐた。間もなく今のが大森先生だと判ると患者は何時も大恐縮。

博士或時田舎に行つて足を痛めた事があつた。早速近所の醫者に馳け込んで手當を頼んだが、醫者は頗る冷淡に

『之でも著けて置きなさい』

と貝入りの膏藥を一つ呉れた、博士は黙々として其れを貰つて歸た。

或年筑後柳河町に巡回の際、早朝床屋に行つた。床屋は夜が遅いから未だ起きた許り

で店には誰も居ない。博士は其處にあつた剃刀を取り鏡に向ひサツサと髯を剃り上げ、相當の代價を拂つて立ち去つた。

◇
明治三十一年洋行から歸つた時である。博士は「西洋では婦人を大事にする、汽車に乗る時も必ず男が助けて乗せる事が紳士の禮である」

と柄にもない事を云ふから、傍に居た看護婦が「夫れちや先生も手を取つて下さるでせう」

『そらアあらにヤこて』

一日博士が洋行の土産話をするといふので、醫員看護婦一同講堂に集つたが、博士は極々低聲の而も極々の訥辯なので筋さへ聞き取す一同眼をパチパチ。後で質問を許したから一二の質問が出る
『矢張り行つて見にや解らん』

と済ましたものであつた。

◇
其時今の水茶屋常盤館即ち當時の集成館で官民有志の大歓迎會が催された。席定まつて博士が洋行土産の大演説があるといふので満場緊張する。博士は例の覺束ない訥辯で『獨逸邊の公園には密柑の皮など散らかして居る者はありません』
と云つたぎり、サツサと自席にかへつた。それが大演説の總てであつたので、聴衆何れも呆つ氣にとられてしまつたが、洋行中最も博士の印象に残つたのは公衆衛生に最も關係ある事のみであつたと云ふ事が、此簡單なる大演説によつて知られる。

◇
博士唯一の隠し藝は其の獨特の猿の真似であつた。宴酣に杯盤狼籍たるにあたつて、博士は徐ろに上衣を脱ぎ、赤の襯衣、赤の股引、赤靴下と云ふ赤いものづくめの姿と爲り、緒顔自から猿となり對手を猿廻に扮装させ、其が差手引手の網加減に隨ひ舉手投足

宛然猿の表情をなし、時に綱引の肩に飛上り、或は背に負さりなごして満場を笑はせたものである。

一〇六

◇
外科手術の他萬事に無調法な博士も嘗て音楽を研究した事がある。明治二十四年の春福岡須崎裏の博士邸の西隣に住んでゐた看護婦取締坂田老女史から勧めらるゝまゝに同女史から二弦琴を習つた。扱て第一の口切りに今様を上げて第二番目に『新菅搔』を教はつたが此曲の文句は

千早振る神の傳へし八雲琴、菅搔きならせ大和心に

と云ふので其の最後の『大和心』の處に間があつて、息を切らねばならぬ、博士は苦辛慘憺奈何程研究しても思ふ通りに行かぬので、

『凡そ何程の時間、間を置たら良いか』
と質問したが、遂に

『俺ア大和心は中々好きぢやが、何故出来ぬぢやらうかい』

と長大嘆息を漏した。其頃博士と以前福岡病院にあつて、後久留米病院長になつて居た故齋藤氏が或る晩尋ねて来て共に酒を飲んだ事があつたが博士が酒興に乗じて、

『僕は近頃二絃琴を稽古してゐる』

と言ふと氏は

『君の様な無器用な者が弾けるか』

『イヤ弾ける』

獨りノコノコ西隣の坂田女史の宅に来て

『治豊だよ』

とトントン戸を叩くから思掛ないお客様に吃驚して居ると

『久留米の齋藤が来てアレを弾かねばならぬ事になつた。お文(夫人)のはいけぬ、是非来て歌つて呉れ』

一〇七

と頼んだ。

又同取締が或時

「先生も一つ位藝をお覚えなすつては何うですか」

と云つて紙で人形を作つて障子の蔭で蠟燭を動かし影人形を舞すことを教へた。博士は大いに喜び

「之は面白い、が此人形を持つて歩くのが」

取締は

「其は先生方は解剖や何かの學問で知つて居らつしやいますから譯は無い事でしょうよ
即座でお作りなさればいゝではありませんか」

と打笑つた。

◇

博士が選舉に手を焼いた話は當時有名な一話柄となつてゐた。縣立病院時代博士は同

院長で、福岡縣技師と云ふ官名をもつてゐた頃の事である。博士は當時玄洋醫會長でもあつたが、同會理事某が衆議院議員の候補に立つたので、博士は熊谷副會長と連名で其の推薦狀を各有権者へ配布した。處が選舉前僅か數日と云ふ日になつて大々的攻撃が博士の身に降り掛つて來た。反對側では博士が縣技師と云ふ肩書を有して居るので官吏の選舉干渉として知事に訴へ、同時に其機關新聞からは直接博士に肉薄して

「推薦狀を取消さねば所存がある」

と突込まれた。博士は蒼皇として幕僚を會して協議したが、何うも現職を犠牲にして迄盡さうと云ふ協議にはならなかつた。結局幕僚の議を容れて取消文を有権者に發送し、一方には博士はこの取消が有効であるか、但しは取消しても一旦法規を犯した以上は懲戒を免れぬものか、若し罪があるなら、自ら候補者となり選舉場裡に討つて出ようと決心した。選舉はいよく明日となつた。早朝知事を訪問し知事の意向を確めた。知事が懲戒處分を爲ないと云ふ内意を得たので直ちに病院に駆け込み、自宅に待つてゐる幕

僚に電話を掛けた。一方自宅では、イザとなれば博士を候補に押立て、一夜の中に大決戦だと、夫人を始め幕僚が様子を待ち焦れてる處に忽ち電鈴が響くので、早速受話器を手にすれば博士は例の濁つた聲で

『萬歳………』

と驚くばかりの大声で一言叫んだ切り、其ま、電話を切つて了つた。一同始めて安心して直ぐに病院に行つて見ると、博士は

『ハツ、ハツ、ハー』

◇

博士前夫人の歿後、明治二十六年後妻を迎へたが、其の結婚當時の逸話が面白い。夫人は當時岡山に居たが媒介人は大阪の清野勇であつた。博士は當時再婚の希望があつて各地の友人に候補者推薦方を依頼して居たと見えて、一日清野から

『ケツコンシタカ』

と電報あり、博士は早速

『イマダシ』

と返電した。すると清野から又電報が来た

『コウホシヤアリミニコイ』

博士は

『アイミ(相見)ルハグ(愚)ナリ、アイシル(相知)ノホウ(法)アリヤ』

と返電したが最後に清野は

『イワクアリ』

と返電した。博士は豫て漢學の造詣あり、従つて其文章も頗る簡單で、平生の日誌を始め醫院の病床日誌や豫診書などにも往々『矣』『焉』等の助辭を使つて居た位だから電報の文なども多くは此類なので清野氏の

『イワクアリ』

なごも博士の口吻に釣込まれたもの。

一一一

酒々落々として無邪氣なること嬰兒の如くであつた博士は、其死に臨んで遺言もなく辭世もなかつた。唯死期に先だつこと僅か四五日前の或夜、枕頭に侍して居る昵近の人々を相手に無邪氣な話をして居た。四方山の話の端は何時しか各地の方言話になつた。博士は不叶ひな口で

『イヤ地方によると馬やら舐やら猿やら鬼やら食ふ所がある』

『朝馬（朝の間）來う。』

『一寸イタチ（行つて）來う』

『其時きや二人で歩行う』

『そんならオニ（已）も來う』

『ハツハ、ハツハ……………』

と大笑しては一座の臍をよらせたものである。博士は又其夜熊谷博士の噂して、

『熊谷が何時やら齋藤（故久留米病院長）が所へ行つた時』齋藤が

『大森は此頃は何うか』と尋ねた。

『大森も脚がつまらぬ』

と云つたが、熊谷は自分の脚をゴロゴロ引ツ張り歩いて居て、

『ハツハツハツ……………』

是が最後の笑ひで、後、日ならず言葉が出なくなつた。

山川健次郎博士

樞密顧問官の重職にある理學博士山川健次郎男は、大森博士に次いで九州帝國大學を育んだ人である。福岡醫科大學が、いよ／＼九州帝國大學となつて京都帝國大學から獨

一一三

立するに及んで、我が山川健次郎博士は最初の總長として着任した。爾來大正二年五月九日迄あの古武士的な、氣節に富む山川健次郎博士によつて、我が九州帝國大學は、益々其の基礎を強固にしたものである。

博士も亦立志傳中の一人として、茲に其の人となりを顧み、その性格の一片を知る事にする。

我が山川健次郎博士は人も知る白虎隊の勇士——會津藩の家老職、祿高一千石の家に生れた。しかし、舊幕の頃の習慣として、どんな家柄に生れても、長男でない以上、大した出世を望むことはむづかしく、二男三男は所謂部屋住みとして一生を終らねばならなかつた。殊に彼健次郎は幼少の頃は極度に身體が弱く、藩校日新館でも病氣缺席の多いこと、健次郎が隨一であつた。それで両親はじめ親戚の者からも

『こんなに弱くては大した出世も出来まい』
と思はれて居た。

彼は十三四歳の頃になると、おぼろげながら、かうした周圍の事情を察し部屋住みの身である自分は、會津なきにゐては到底出世することは出来ない、兎に角江戸に出で勉強しなければ——彼れはかう考へて、機のを待つて居た。俄然天下の形勢は急變した。徳川慶喜はついに大政を奉還した。しかし幕府の舊臣中には飽くまで徳川の天下を支持しやうとして、官軍に抗するものが多かつた。即ち會津藩は、徳川家との關係が浅くないので、敢然東北の諸藩を糾合し、潔く官軍と一戦を試みる事になつた。かくて白虎、朱雀、青龍、玄武の諸隊は忽ちにして編成された。中にも白虎隊は、はじめ十五歳から十七歳までの少年を以て組織された。彼山川健次郎はその時正に十五歳、藩議として幼少組に編入される事になつた。しかし彼れは頑として之れに反對した。

『幼少組など、戦争もしない組に編入されてさうするのだ、俺丈けはどうしてでも白虎隊士として働く』

彼は強硬に抗議を申し込んだが、藩議である以上、しかも彼の如き青瓢箪を白虎隊に

入れやう筈もない。健次郎は、あの精悍な眼をキラキラさせて憤った。そして又更に強硬に云つた。

『俺はいくら断られても、絶対に白虎隊士として働くのだ。戦争に出る以上、勿論生命は既に君公に捧げてゐる』

嚴然として動かなかつた彼は、たうとう内密に士中白虎隊に入る事になつた。

しかし、東北の諸藩中には、豫期に反しく官軍に通ずるものがあつて、會津藩若松城は愈々孤立無援、藩士は城を枕に討死せねばならぬ形勢となつた。此の時藩の儒者秋月胤水は、數年前から時の官軍、長州兵の參謀、奥平謙輔と親交があつた。奥平は城中の秋月に向つて、徒らに藩兵を殺すより、此の際穩便の處置をとつてはどうか、若しさう決心がついたら自分も出来る丈け盡力しやう、と云ふ書を贈つた。秋月は奥平の勧めに従ひ、穩便な處置をとる事にし、寺小姓に變装して圍みを脱出し奥平に會見した。そして彼は會津藩も此の後大いに人物の養成につとめねばならぬから、早速君に二人の人物

を預つて貰ひ度いと頼み込んだ。奥平も直ぐ承知したので、秋月は藩から山川健次郎と小川亮の二人を選抜して奥平に預ける事にした。しかし、まだ官軍の圍みは更に緩まない、山川と小川の兩人は、眞龍寺の住職に連れられ、眞夜中に間道を越後に向ふことになつた。一行は住職と彼等の他に二人、分れ／＼に、蟻の這ひ出る隙もない嚴重な圍みを突破する事を得たが、その中の一人は遂に捕へられて首をハネられた。が健次郎の一行は、幸ひに無事に奥平謙輔のもとに着いた。

『全くあの途中はもう死んだものと思つてゐた。何しろ途中關所にかゝつた時等は、白刃をつきつけられ、嚴重な訊問を受けたのだが、眞龍寺の住職は、なか／＼の才物だつたから、法要に行くのだと云つて、到頭關所を切り抜けてしまつた』

と山川男は今にその夜を回想しては語つてゐる。かくて山川健次郎は奥平の書生として越後の藏書家遠藤氏のもとに起居することになつた。これが明治二年正月のことである。此の頃天下は薩長全盛の時代で、會津藩の如き、一時叛旗を翻へした藩は見る影もな

かつた。陸海軍も、政治界も共に薩長人でない以上、到底榮達はむづかしかつた。機を見るに敏な彼は學者として立たうと決心した。幸ひに遠藤氏は、有数の藏書家であつたので、彼は日毎、夜毎に和漢の圖書を食るやうに讀み耽つた。だが、學問をするには何うしても江戸でなくては駄目であつた。健次郎は翌明治三年の春決心して上京、會津藩の學校に入り孜々として苦學を續けた。勿論其の當時は、既に福澤諭吉の慶應義塾もあり、今の東大の前身たる開成學校もあつた。しかし、學資のない彼は此等の學校に入學する事は到底出来なかつた。それで彼は幕府の歩兵頭であつた時の知合ひである沼間守一の塾に藩の學校から轉學した。其の後も更に苦學を續けた。讀むに書籍なく、買ふに金ない彼は、わづかに他人の書を借りては夜となく晝となく筆寫したものである。

ところが此の時に當り、彼の運命を拓開すべき好機が來た。それは當時北海道開拓使長官の提議により、北海道開拓のために、特に人材を養成することに決し留學生を海外に派遣する必要が起つた。それには薩長の人々以外に、寒氣に馴れた東北の諸藩から之

れを选拔しなければならぬと云ふので、會津藩、松前藩、庄内藩から、各々一人づゝ推薦する事になつた。此の時會津藩の重臣、永岡久義は、夙に健次郎の才幹に眼をつけてゐたので、直ちに山川健次郎を推薦した。かくて彼はいよいよ留學を命ぜられることになり、當時出來たばかりの怪しげな人力車に打ち乗つて、各大臣參議の下を回禮したものである。

明治四年の正月元旦である。十八才の山川健次郎は洋々たる前途の希望に満ちて、横濱を出帆し、その月の二十三日米國サンフランシスコに着いた。やがて彼はエール大學の工科に入つて、刻苦勉強した。間もなく意外にも、彼は本國から留學生たることを差しとめられた。其の理由とする處は當時我國政府は、西洋萬能を唱へ、何でも外國でさへあれば新知識を得られると云ふので、各省から無暗に留學生を濫發させた。ために漸く其の弊に堪へなくなり、從來の方針を一變し、留學生中最も優秀な者のみに限り、其他を整理する事になつた。彼山川健次郎も整理される一人になつたと云ふのである。然

し例へ本國から歸國を命ぜられたとは云へ、留學數年漸く目鼻がついた矢先に、之れを放棄し、歸國する程意志薄弱な彼ではなかつた。彼は勞働してでも苦學すると決心した。此の時彼の親友某は、彼に同情し、自分の伯母である米國有數の富豪バンドマン夫人に此の窮狀を訴へた。夫人も大いに同情し、兎に角會つた上で何とかしやうと云ふので、山川は夫人と面會する事になつた。夫人が

『貴下は歸國しないで、一體どうするお積りですか』

『わが日本のために私はつくしたいのです。わが國は今最も重大な時機に際會してゐるのです。最も多方面に人材を必要する時です』

山川は嚴然として答へた。かくて彼は夫人に誓つた。

『學成つて日本に歸らば、力の限りを日本につくすべし』

夫人は彼のために學資を出す事にした。

其の後二ヶ年、山川健次郎は首尾よくエール大學を卒業する事を得た。刻苦精勵、學

成り、意氣揚々たる彼の姿を再び横濱の埠頭に見たのは明治八年である。翌九年直ちに彼は東京帝大の前身たる開成學校の助教授に招聘された。

次いで教授に進み、學界のために盡すうち、明治二十六年、菊池大麓男の後をうけて理科大學長に任せられ、超えて三十四年には、東京帝國大學總長に擧げられた。

▽

我が日本が其の名を世界に知られ急速の進歩をしたのは實に日清、日露兩役に於ける戰爭の結果である。が、此の日露戦役は全く我が山川健次郎博士によつて開戦されたものであると云つてよい。名もなき微々たる我が帝國が世界の帝國として旭日昇天の勢を示してゐる、當時の露國を向ふに廻して戦ふまでには、我が國內の輿論は區々として一致しなかつた。政府も亦帝國の運命を賭する戦端は容易に之れを開かうとせず露國の專横に委せんとした。此處に奮然として立つたのは當時の東大總長山川健次郎を始め戸水寛人、建部盾吾、寺尾享その他三博士である。此の七博士は日々帝國の威信を傷け、專

横を逞うする露國に我が帝國は須らく挑戦すべきだと首府東京に國民大會を開き、全國の津々浦々を行脚し輿論の喚起に努め政府を攻撃した。かくて輿論は沸騰し、遂に政府も之れに動かされて開戦する事に決したが、教育の任にあたる大學教授が國政に干渉するとて政府は之れを攻撃した。

問題は政府對東大の問題となり、七博士問題として天下に喧傳され、七博士は遂に連袂辭職の已むなき有様となつた。此の時にあたり、氣節の人我が山川健次郎博士は

『責を我れ獨りで負ふ』

と、東大總長の職を弊履の如くすて、教育状態を視察すると九州に草鞋行脚をやつた。

此の當時、安川男が明治専門學校を戸畑に創立しやうとする時であつた。安川男は、其の總てを山川健次郎博士に委せた。今日明專が天下の明專となつたのも其の創立の第一歩が彼によつて力強く踏出された資である。かくて明治四十四年四月一日京都帝國大學福岡醫科が九州帝國大學醫科大學となつた時、山川健次郎博士は大森治豊博士の後を受

けて、九大總長に就任した。

博士はかうした氣節の人で、全く古武士的な氣骨稜々たる處がある。何事につけても

『いけない』

と云つたら徹底的に『いけない』人であつた。妥協を許さぬ人であつた。しかし學生が異口同音に叫ぶ時は俺は『いけない』と思ふけれども、それが學生全體の意志であるならと云つて大抵の事は容れたものである。それほど彼は學生を可愛がつてゐた。大正二年九大總長を退き、今は樞密顧問官の重任を帯び、只管國家のために盡してゐる。

眞野文二博士

山川健次郎男の後を受けて九大總長となり、工學部の充實、農學部及び法文學部の創設を遂げ、九大をして今日綜合大學の實を挙げしめたのは眞野文二博士である。博士は大正二年二月九大總長に就任し、大正十五年三月其の職を辭するまで、此の間實に十三

年、一日の如く九大のために努力したものである。博士が就任した當時までは實に九大も微々たるものであつた。工學部等は全く出來たばかりであつたが今や既に七百に上る卒業生を送り出し、教授も四十名の多數に上り我が工學界に於ける一分野をなすにいたつたのは博士の資でなくて何んであらう。其の後大正七年より同十二年迄六ヶ年間の繼續事業として農學部を創設し、次に大正十二年法文學部を設置して九大の完成に盡したものである。奉加帳を腰にブラ下げてテク／＼往診をやり患者から生佛と拜まれて今の九大の基礎を築いた大森治豊博士と共に九大の大恩人である。

天下の耳目を聳動せしめた所謂九大事件當時の如き其の元締たる總長眞野文二博士を批難する聲は天下廣しと雖も一度すら聞かなかつた。會ふ人毎に、讀む日々の新聞毎に「總長が氣の毒だ」と同情を寄するものはあつても、決して批難する者の無かつたのはかねての博士の人格の然らしむるものでなくて何んであらう。それにしても六十の坂を五つも超える迄只管「九大の完成」に一身を捧げた引退の間際にあつて、彼の九大事

件を惹起したのは返す／＼も遺憾の極みである。

博士は又人格の人であつたと共に手腕の人でもあつた。總長としての政治的手腕を持つてゐたため九大の豫算も東大京大の二大帝國大學と比較して遜色を見なかつた。僅少の年處にして九大が綜合大學の實を擧げ九州隨一の學府となり得たものも其の政治的手腕の資である。しかしながら博士も九大事件真相報告のため上京すると直ぐ其の後に火災を起し、其の急報を得るや遂に盲腸炎をひき起して仕舞つた。又一週間ならずして二度目の火災を病床に聞いた時、流石の總長も始めて

「又やつたのか」

と寢返りを打つたと云ふ。それ以來博士は健康勝れず、遂に多年の希望であつた辭意を岡田文相に容れて貰ふ事にした。實は博士の還暦祝賀會が催された當時より、辭意を有してゐたが、農學部創設と云ふ九大にとつて最も重大問題が横はつてゐたので、さうしても許されなかつた。其の後法文學部の設置、九大事件と引き続き問題で却々引退の

機會を得ず、文相も亦無理に留任をすゝめて九大完成を懇望したものである。

博士はあの小烏馬場の自宅からカーキ色の洋服にボロ靴をはいて十三年一日の如くテク／＼と通ひとほした。雨の日、風の日大學の自動車が迎へに行くと「イヤ乗らぬ俺は歩く」とサツサと出て行つた。盲腸炎が相當重くあつた時でさへ決して自動車を出動用にはしなかつた。遂に博士は「依願免本官」の辭令を握つて多年住み馴れた九大に最後の別れを告げて歸る時迄テク／＼と歩いたものである。九大總長を引退するや

「九大が名残り惜しいので出来るだけ永く此の地に居る積りだ。十三年間福岡に暮したが、まだゆつくり福岡を見物した事もないから、之れからゆつくり見物でもしやう」と云つてゐる。此の一事を以てしても博士の總長生活が如何に多忙であり、且つ博士が只眞面目の一語を以て、その行動を終始してゐたかが知られる。茲に輝く博士の略歴を顧みる事にする。

正三位勳一等工學博士眞野文二氏は文久元年十一月十四日江戸本郷弓町に生れ本年六

十六歳である。東京府士族舊徳川幕府旗下眞野肇の男舊名を文次郎と云つた。明治八年四月工學寮に官費入寮、同十四年五月工部大學卒業、工學士となり工部七等技手に任ぜられ月俸三十圓、工部局大學校詰教授補となり、同十五年工部大學助教授に任ぜられ同十七年地動試験のため富士山頂へ出張を申付けられた。十九年七月より機械工學水工科修業のため滿三ヶ年間英國に留學し、グラスゴー大學に入り、次いでアームストロン科工場に入り實地研究をなし廿一年九月歸朝、同年十月工部大學教授に進んだ。同廿三年内國勸業博覽會審査官を兼ね、藍綬褒章を賜り、同廿五年八月工學博士の學位を授與された。

同廿六年五月震災豫防調査委員となり、卅二年十一月廿五月佛國に差遣され、卅三年九月歸朝、東京御所御造營につき暖房機械装置を監督し、卅四年文部省實業學務局長に任ぜられ同卅六年一月震災豫防調査委員長となつた。同四十三年五月英國に、更に横濱國に差遣され歸朝後大博覽會工事計劃審査員となり、大正二年二月廿一日九州帝國大學

總長に任ぜられ同三年二月東大名譽教授の稱號を受け、同五年七月教育調査會々員となり九年十二月勳一等に叙し瑞寶章を授けられた。九大總長たる事實に十三年間、我國の大學總長生活中レコードを破り大正十五年三月遂に依願免本官となつたものである。

博士はまた趣味の人である。學生時代にはボートのチャンであつたが、能謠曲も梅若門下中の上位に据つて居る。圍碁に於ても雁金氏の門弟として初段と迄はなつてゐないが、素人中の上位である。和歌も相當うまく、嘗て隅田川で大學の對部レースに工科が連勝した時

三たびまで勝ちし隅田の艇競へ

こゝろき立つ花の白雪

と即吟して同級生からヤンヤと喝采されたものである。尙還曆の祝歌に對して

いたつらに年波はかり打寄せて

眞野の浦邊は見るかいもなし

を返詠を贈つた。その他年々新年の勅題に詠進して居る。又博士の蝶採集に熱心な事は久保博士と共に知られてゐる。博士の應援室とその書齋とは親ら採集した蝶の標本によつて飾られてゐる。

大工原銀太郎博士

九大總長大工原銀太郎博士は今後の九大を負つて立つべき人である。前總長眞野文二博士が引退するにあつて九大では總長互選を行ひ工學部西川虎吉博士が當選した。博士は

『自分には多年繼續研究中の曹達事業がある。今もう暫らくすると、完成すると云ふ全く手を引かれない大切な時期であるから、辭退させて貰ひ度い』

と懇望したが選舉委員長の高山正雄教授や其の他の教授が、頻りに就任を勸説したので博士は暫らく考へさして貰ひ、先輩等に相談した上で、と云つて上京したが、やがて

歸學して全く今期丈けは許して貰ひ度い、と、たうとう辭退してしまつた。九大では再び選舉をやり直す事になつたが、今度は前選舉で次點であつた醫學部の高山教授が當選するものと豫期されて居たが、博士は亦此の選舉前に醫學部長の職を退き

『之れから素つ裸で焼けた教室の復興に努力する。そして専門の研究に没頭する』

と暗に當選しても受けないと云ふ意志を示した。それで白羽の矢は工學部の長老服部鹿次郎博士や、法文學部長美濃部達吉博士等に立ちはいまいかと云はれてゐたが、意外にも朝鮮勸業模範場長として九大農學部教授を兼ねてゐる大工原銀太郎博士が當選した博士は當選した其の場で

『皆様からは是れ程依頼されるなら及ばずながら總長の職を御受けします』

ときつぱり云ひ放つて居並ぶ百餘の教授に怒眉を開かしめた。

かくて前總長眞野博士も『此の人なら』と喜ぶし、學内の人々も『最も適當な人にあつた』と満足した。當選した大工原博士は自分の後任に九大農學部長の加藤茂苞博士

を据え、眞野總長も一日も早く引退を希望してゐるので、大臣や總督との交渉を一鴻千里に進め、直ちに總長に就任した。

博士は長野縣の生れで今年五十九歳である。眞野前總長の云ふ如く全く此の人は『靜かな』人である。名利に冷淡であるのみならず、餘り焦らず餘裕綽々と靜かに所信に向つて勇往邁進する人である。又博士が決斷に富む事は總長に當選した此の場に何等の躊躇も見せず『萬難を排して總長の職に就きます』ときつぱり云ひ放つた事を以ても察する事が出来る。尙朝鮮模範場長として就任した當時從來の情實を排し、同場内に大斧鉞を加へたる如き其の決斷力の然らしむる處である。

博士は東大の古在總長と共に駒場出の秀才である。明治二十七年駒場の農藝化學科を卒業すると直ぐ二十八年農事試驗場技師に任じ四十年一月東大農科の講師を囑託されたやが大正六年二月特許局技師となり學術研究のため英、獨、佛、澳に留學、又米國ワシントン及び紐育で開かれた第八回應用化學萬國會議に列席し、専門の造詣を加へると

共に政治的色彩も多分に加つて来た。歸朝後論文を提出して農學博士の學位を得、朝鮮勸業模範場長、水原高等農林學校長、九大教授と云ふ三人前の仕事を引き受けてゐた。趣味としてはとり立て、云ふべきものもなく、學生時代よりよく撞球をやつて居た位である。

博士は又肥料學の權威である。土壤の酸度定量法研究を具體化し、遠洲三方ヶ原三千餘町歩、豊前の新田原等を始めとし、日本全國に亘つて廣漠なる不毛地を開墾利用したのは博士である。

博士は子福者であつて三男二女がある。長男孝は東大工科を出て今京都蠶絲の教授をしてゐる。二男潔及び三男博は小石川の京北中學に在學してゐる。長女賤子は司法省の大原書記官に嫁し、二女小夜子は千葉縣廳の土木產業課長に嫁してゐる。

九大事件によつてショックを受けた九大も此の靜かな、決斷力に富む、手腕家の大工原銀太郎總長によつて復興するであらう。

醫化學教室

後藤元之助博士

九大醫學部基礎醫學で最初に出來たのは、後藤元之助博士の醫化學である。教授後藤元之助博士は小兒科教授伊東祐彦博士と共に、九大の創立時代から今日迄働いて來た九大の恩人である。博士には理窟もない、議論もない、唯黙々として明治三十六年以來十年一日の如く、九大醫化學のために努力して來た。齡既に六十歳であるが壯者にも勝る元氣がある。博士はいたつて質朴な人で新奇な、華美な事を頗る嫌つて居る。

慶應三年六月岐阜縣揖斐郡、野村藩士後藤總次郎の二男として生れた。明治八年野村小學校に入學し、十三年岐阜縣醫學學校に入學した。明治二十七年東大醫科を卒業したが森島庫太、足立太郎、河西健次等の博士と同期生である。助手を経て、同三十年東大醫

科助教授となり、三十二年私費を以て獨逸に留學し、同三十六年歸朝直ちに京大福岡醫科大學教授に任ぜられ、同四十二年推されて醫科大學長となつた。四十四年九大が京大より分れて獨立したので九大醫科大學長と改め、大正二年學長をやめ、専任教授となつて今日に及んでゐる。

論文「痲痺セル筋肉延長試験」「フヌクレイン」酸及「チミン」酸ノ尿酸ニ對スル容解作用ニ就テ「プロタミン」ニ就テ」を東大に提出し、明治三十八年一月學位號を得た。夫人とめ子は岐阜縣青木久藏の四女である。

法醫學教室

高山正雄博士

我國の法醫學教室は、其の泰斗片山國嘉博士が東大に開設したのと、高山正雄博士が

九大に築き上げたのが、標本の蒐集された點から云つても、内容の充實した點から云つても、最も有名である。九大法醫學教室は高山博士が明治三十九年九大に赴任して以來、築かれたものである。博士は四期學部長を重任し、其の忙しい生活の中にも決して教室の建設を忽にしなかつた。然るに大正十四年九月の九大事件直後の火災で、其の標本は烏有に歸した。此の時博士は、恰も上京中であつたので、何一つ持ち出す事も出来なかつた。博士は此後裸一貫になつて教室の再興を、はからねばならぬと決心し、學部長の職を退いた。同教室の出身者には、目下新潟醫科大學の法醫學教授をしてゐる藤原教悦郎博士や、一月より留學した同教室助教深町穗積等がある。

高山博士は長野縣松本市の生れで、當年五十六歳、博士は質朴な人格者である。學者肌でもあるが、多少政治家的手腕もある。他の教授達が堂々たる邸宅を構へる時博士は福岡市春吉に在る家賃四十五圓の家に平氣で永年住んでゐる。恐らく一生涯あの家に住むであらう。天下を騒がした九大事件には、流石に博士も頭を悩ましたが、それでも學

部長としてやる丈けの事はやつてのけ鼻をつけた。然し十月の火災で教室を焼失した時には、ひどく悲觀した。九大事件の後始末も略ついたので、博士は此の二月多年勤めた學部長の職を退き、ひたすら研究に従事し、教室の再興を圖ると云つて居る。

博士は明治三十一年東大醫科を卒業した。林春雄、今村新吾、松岡道治、中山政男、中川劍三郎博士等と同期生である。四高醫學部教授から、同三十二年東大醫科助教授となり、同三十六年獨逸に留學し、留學中京大福岡醫科大學助教授に轉じ、同三十九年歸朝直ちに教授に進んだ。其の後官制の改革と共に九大醫科教授となり、次で九州帝大教授となつた。大正三年以來四期の學部長に重任し、名學部長として令名があつたが大正十五年二月學部長を辭職した。主論文『毒物學及法醫學補遺』他に參考論文二篇を東大に提出して、明治三十九年十月學位を得た。此の論文は獨逸文にて、獨逸スツウトガル市で出版した。九大に於ける醫學部首腦部の一員で、未來の總長として矚目されて居る。

病理學教室

中山平次郎博士

九大醫學部病理學教授中山平次郎博士は、我國に於ける病理學の權威であると共に、古考學者として有名である。九大の病理學教室は此の中山博士と田原博士によつて築かれたと云つても決して過言ではない。中山博士は、今年五十六歳であるが、今日迄獨身で、稚氣滿々、旅行好きで、學生の人氣がある處から、夏期休暇、春期休暇等にはよく學生を率いて、滿洲或は臺灣と各地に旅行する。日曜日等博多驛發の三等列車の中によく博士の近郊散策姿を見受ける事がある。

博士は明治四年六月東京市に生れ、中山森彦博士は其の長兄である。明治三十三年東大醫科を次席の銀時計で卒業した。同期生には今淵恒壽、難波要、久保猪之吉、中金一

等の博士がある。第一高等學校大學豫科第三部を卒業し、同年東大醫科に入り、三十年特待生となつた。同年十二年卒業し、助手となり、病理學教室に勤務、三十六年一月、病理學、病理解剖學研究のために、滿三ヶ年間獨、塊、洪等に留學して、三十九年八月歸朝、京大福岡醫科大學教授となり大正元年九月九大學生監となつた。

學位は明治四十年十一月京都帝國大學總長の推薦により授けられたものである。

病理學教室

田原 淳 博士

教授中山平次郎博士と共に、九大醫學部病理學教室を創設した人は、田原淳博士である。博士は中山平次郎博士と殆んど同時に九大の前身京大福岡醫科大學の助教授となつた。今年五十六歳で中山教授と同年代である。大正三年七月帝國學士院から、賞牌及び賞

金を授與せられ、田原素の發見者として學界に有名である。温厚な人格者で、あまり口をきかない人である。明治六年七月大分縣東國東郡西安岐村中島定雄の長男として生れ、後ち同縣中津町田原春塘の養子となつた。

第一高等學校を経て、明治三十四年即ち中山博士より一年後れて東大を卒業した。同期生には長澤傳六、杉本東造、三田定則等の博士がある。卒業後助手となり、三十五年官命により獨逸に留學し、マールブルヒ大學に研究、同三十九年歸朝直ちに京大福岡醫科大學助教授となつた。やがて教授に進み、病理學第二講座を擔任する様になつた。

論文『哺乳動物ノ心臟ニ於ケル刺戟傳導筋系統（心臟房室）間連絡筋束及び所謂ブルキンエ氏纖維ノ解剖的組織的研究』『心臟ノ所謂異常離糸ニ就テ』『最近心臟衰弱ノ原因ヲ説明スルノ病理（アシヨフ氏共著）』を東大に提出し明治四十一年一月學位號を得。尙此の論文に對しては、帝國學士院より學士院賞を授與されたものである。

解剖學教室

小山龍徳博士

九大解剖學教室の創設者小山龍徳博士は今年六十七歳で、九大醫學部に於ける最長老教授である。解剖學の權威小金井良精、足立文太郎、加門桂太郎博士等と共に我國解剖學の開拓者である。博士が九大に來たのは明治三十七年で、當時はまだ京大福岡醫科大學であつた。其の後二十有餘年間九大解剖學教室を育て上げたものである。

萬延元年三月舊熊本藩士小山玄龍の長男として、江戸木挽町に生れた。舊名を規次郎と云つた。明治四年熊本平川駿太郎の私塾に入り、其の後ち古城洋學校を経て、東大醫科に入り、明治二十年同科を卒業した。其の同期生には、三浦謹之助、芳賀榮次郎、阪田快太郎等の諸博士がある。卒業後直ちに熊本縣八代郡立病院長となり、同二十三年五

高醫學部教諭に任じ、同三十四年長崎醫學專門學校教授となり、翌年獨逸に留學、同三十七年歸朝、直ちに京大福岡醫科大學教授に進み、大正二年官制の改革と共に九大教授となり、同九年歐米視察をした。

主論交「タルバ、オイロペア」ニ於ケル汚溝隆起ノ發生ニ就テ（ドクトル、ヂスセ合著、『白鼠體毛ノ發生』を東大に提出し、明治三十九年三月九日博士となつた。夫人和加子は長野縣士族戸澤櫟蔭の三女にして、長男準二は九大農學部助教授である。

解剖學教室

櫻井恒次郎博士

教授櫻井恒次郎博士は小山教授と共に九大醫學部解剖學教室を育てた人である。兵庫

縣の人で今年五十五歳である。博士は少しも尊大ぶらず、平民的である。一時は九州各縣下に於ける體操研究のため、巡回した事もあり、體操博士の綽名があつた。夫人みつ子は故醫學博士大澤岳太郎の女である。博士は明治三十六年助教として九大に入り、三十九年教授となり解剖學第二講座を擔當し小山教授と共に、九大解剖學教室の建設に努力して來た。

明治五年三月兵庫縣士族櫻井勉の長男として生れ、明治二十九年第一高等學校を卒業、直ちに東京帝國大學醫科に入り、同三十三年十二月卒業、續いて同學の助手となり、同三十五年文部省より命ぜられて、解剖學研究のため獨逸に留學、留學中京大福岡醫科大學助教となり、三十九年五月歸朝と同時に教授に進んだ。博士の同期生には九大醫部教授中山平次郎、久保猪之吉博士の他には、楠本長三郎、中金一、石原弘等の博士がある。

明治三十九年十月、主論文「フレイ」鹿ノ一種ノ發生常規表を東大に提出して學位を

得た。新撰解剖學、美術解剖學の葉、筋學、血管學、骨學の他數冊の著をなして居る。

眼科教室

大西克知博士

九大眼科の今日あるは教授大西克知博士の賜である。博士は愛知縣の生れで、今年六十二歳である。明治三十八年京大福岡醫科大學教授として赴任し其の後眼科の建設に努力した。九大に於ける畸人として知られてゐる。博士は滅多に誰にでも面會しないが殊に新聞記者に會ふのと寫眞を撮るのが一番嫌ひである。嫌はれる新聞記者は一層行つて見ると云ふが、ある時の話である。刺を通しても會はないときまつて居るから、直接其の室をノックした。コツ／＼二度敲いて見たが、何等返辭がない、拳を堅めてもう一つひどくゴツ／＼やると、ハイと嚴かに返辭がした。占めたと思つてギューとドア

一を開けて這入る。博士の炯々たる眼光の前にツカ／＼と近づき、名刺をつき出し、殊にお念入りにお辭儀をすると、

『お・君は新聞記者かい、俺は用はない』

『イヤそつちから用がなくても、こつちから用があります』
と出ると

『イヤ其の用に又俺は用がない』

向ふを向いたぎり濟し込む。記者やむなく退却。それかと思ふと博士は道にでも知つた新聞記者に會ふと、俺の處にも時々遊びに来給へと會釋する。

博士は現代眼科界の權威として、河本東大名譽教授と共に知られて居る。明治十七年東京醫學豫備門に學び、翌十八年私費を以て獨逸に留學、始めハレール大學に學び、次でチュービンゲン大學にてドクトルの學位を得、翌二十九年歸朝、直ちに三高教授を兼ね岡山縣病院眼科部長となり、同二十八年其の職を辭く。同三十八年京大福岡醫科教授とな

り、其の翌年同學附屬醫院長、同四十三年九州帝大醫科教授、同四十四年醫院長をやめて大正九年歐米を視察した。

博士は主論文『線條性網膜炎ノ一實驗』外に參考論文二十篇を東大に提出して明治三十二年十一月學位を得た。長女は醫學博士稻田進の夫人である。尙其の門下に舊同眼科助教授疋田直太郎博士及び現助教授西岡道隆博士等がある。

第二内科教室

武 谷 廣 博 士

明治八年五月福岡縣宗像郡田島村と云ふ片田舎に、非常な天才兒が生れた。其の名を田中廣吉と呼んだ。此の天才兒は長するに随つて益々天才振りを發揮し、明治三十五年遂に東大を銀時計で卒業した。永井潛、小川瑳五郎博士等は其の同期生である。我國の

内科学界を東大の島蘭博士と共に二分して立つ、九大醫學部内科教授武谷廣博士こそ此の人である。博士は武谷水城に養はれて、其の嗣子となり、大正四年二月其の名を廣と改めたものである。東大の島蘭博士と共に三浦謹之助博士の高弟である。博士が東大の助手から九大の助教授となつて來たのは明治三十八年であるが、同四十三年教授に進み其の後大正十二年附屬醫院長となつたが、此の多忙な中にも、博士は決して武谷内科の建設を忘れなかつたものである。尙博士は明治三十九年獨逸に留學し、英國に遊び四十二年歸朝した。親切で、恭謙な人格者である。今年五十二歳で今が働き盛りであるが博士の内科学的病理學は我國の權威と云つてよい。

主論文『心臟微毒ノ稀有ナル症例ノ追加』外に參考論文として『結核菌ガ皮膚及ビ粘膜ヲ通過シ得ルヤ否ヤニ就テノ實驗的研究』『懐ノ胎生的結核ニ就テ』を京大に提出し明治四十年十月學位號を得た。

第三内科教室

小野寺直助博士

小野寺直助博士は明治十六年岩手縣に生れ、今年四十四歳である。第二内科教授金子廉次郎博士と共に、九大出身にして、將來九大内科を負つて立つ人は此の人を措いて他にない。マラリヤ病の研究にかけては、我國でも博士の右に出る者はなからう。博士はよく臺灣に渡つて此の研究に没頭してゐる。擔當が内科である關係もあらうが、よく教室員を愛し、其の研究の指導に骨を惜まないところから、其の膝下に集る人は、恐らく武谷内科に次いで醫學部で多數を占めて居るであらう。そして自分の弟子が榮轉でもすると我が事のように博士は喜ぶものである。ために博士の弟子には秀才が多く集り、縣立鹿兒島病院の内科部長兼副院長となつた松尾武幸博士を始め、向井元享、吉永萌、小田

定文、上垣道直等の醫學博士は其の主なる子弟である。

明治四十一年九大を卒業し、岩淵友次郎、大平得三、高木繁、田村於兔、矢野雄、明石眞隆、鈴木三伯等の博士と同期生である。卒業後助手となり、大正二年官命にて獨、匈英、瑞の各國に留學し、同五年歸朝、直ちに九大醫科教授に進み、同十年『マラリヤ』の『アシドーヂス』研究のため臺灣に渡つた。

主論文は『アルカロイド』ノ膠様状態ニ就テ並ニ粒子ノ大サ表面張及ビ毒力ノ關係』外二篇で大正八年四月九大に提出して學位を得た。

第一内科教室

金子廉次郎博士

九大内科教授には武谷廣、小野寺直助兩教授の他に第一講座を擔當する金子廉次郎教

授がある。金子博士は新潟縣の生れで、今年四十一歳である。瘦形で如何にも弱さうに見へるが、却々絶倫な精力を持つてゐる。東大に轉じた吳健博士の後任として大正十四年九大に來任したものである。

明治四十四年九大醫科を優等で卒業した。博士の同期生には緒方大象、高畑哲五郎博士等がある。卒業後副手又は助手として母校に勤め、大正七年九大醫科助教授に進み、同八年文部省在外研究員として歐米に留學し、同十一年歸朝、直ちに岡山醫大教授に轉任し、兼ねて附屬醫院内科部長となつた。學位を得たのは大正九年八月である。

主論文『黃疸出血性』『スピロヘータ』病(ワイル氏病)ノ病理解剖』を九大に提出したものである。

薬物學教室

石坂友太郎博士

石坂友太郎博士は、東大の林春雄、京大の森島庫太教授と共に我國に於ける薬物學の泰斗である。博士は又九大醫學部薬物學教授で、九大薬物學教室は此の人あつてのものである。明治四十一年九大教授となつたが、九大の薬物學は此の以前は前記の林春雄博士が擔當して居たものである。

博士は明治六年一月、金澤市石坂專之介の長男として生れ、今年五十四歳である。第一高等學校獨專修科を経て、東大に入り、明治三十四年十二月卒業した。其の後助手として薬物學教室に勤務し、大學院に入り、三十六年四月東大の助教授となつたが、翌三十七年八月薬物學研究のため三ケ年間獨逸に留學し、留學中京都帝大福岡醫科大學助教

授となり、同四十一年一月歸朝と共に教授に進んだ。夫人居賀は故醫學博士高橋順太郎の長女にして、醫學博士藤井壽松は妹婿である。

博士の主論文は「漢藥苦參ノ成分「コトリン」ノ生理的作用ニ就テ」で他に參考論文として「スバルテイン」中毒ノ死因ニ就テ」の他二篇があるが、明治四十年六月大學院卒業と共に學位を得た。

第一外科教室

三宅速博士

九大に三宅外科のあるのは實に誇りである。博士は本年ローマに開かれる萬國外科學會の日本代表として出席するため出發した。我國に於ける外科界の代表的人物は博士であると云つても過言ではない。體は倭少であるが、一度メスをとつて立つ時、實に其の

技倆は鮮かなものである。三宅外科が今日天下の三宅外科となつたのも博士の技倆の賜であらう。同教室を出身した人は助教授の石山福二郎博士を始め全国各地に分布されて居る。博士は明治元年徳島縣に生れ、今年六十歳である。明治二十四年東大醫科を首席で卒業し、同學助手を経て、同二十六年より三十一年まで徳島市に開業し、次で獨逸に留學、プレスラウ大學に研究、三十三年歸朝、同三十四年大阪醫學校の教諭となり、同附屬病院外科醫長を兼ねてゐたが、在職一年半にして、三十六年再び獨逸に遊び、同三十七年歸朝、直ちに京大福岡醫科教授となり、同四十四年九大醫科教授となつた。大正五年九大附屬醫院長に任じ、同八年退き、其の專後任教授として三宅外科の建設に努めて居るが、昨年火災が教室を焼き、永年蓄へられた其の貴重なる標本をも焼失したのには、いたく悲觀して居る。

明治三十四年六月、主論文「膽道ノ微菌關係ニ注意セル膽石ノ實驗的形成ニ就テ」外に參考論文として一篇を東大に提出し學位を得た。尙「膽道外科」と云ふ書を著はして

居る。

第二外科教室

後藤七郎博士

九大醫學部に三宅外科に次いで、創設された外科は後藤外科である。教授後藤七郎博士は大正八年以來此の教室を創始したが同教室出身には中村愛助博士、久留米市に開業する楠正人博士等がある。

後藤博士は軍人出丈けに、何事にかけてもハキ／＼して居る。清廉潔白で、嚴格な人である。明治十四年福岡縣柳河町に生れ、今年四十六歳である。九大系の新進人物にして、將來の九大外科を負つて立つ人は此の人であらう。

明治四十年福岡醫科大學卒業。熊本醫大の池上五郎、福岡に開業する加藤尙義、大阪

に開業する緒方鷲雄、橋本策等の醫博と同期生である。卒業後直ちに見習醫官となり、同四十一年任陸軍二等軍醫、同四十二年京大學院に入學、同四十三年一等軍醫に進んだ同じく四十四年九大學院に轉學し、同年末退學、福岡衛戍病院附、九大醫科大學講師となり、後ち英國駐劄、大正五年任三等軍醫正、陸軍々醫學校教官に任じ、同七年歸朝、同八年九大醫學部教授となつた。

博士の主論文は『所謂多發性進行性化骨節炎ノ病理解剖學的及臨床的研究』であつて大正三年七月九大に提出して學位を得たものである。

整形外科教室

神中正一博士

九大整形外科教室は住田正雄博士が大正二年歐米から歸朝して直ぐ設置した。住田博

士は九大事件で辭職したが其の後任として神中正一博士が着任し、着々地歩を固めて居る。同教室は脊髓カリエス研究を以て聞え學會毎に此れに關する研究を澤山發表したものである。亦此の教室から出身した人は多數あるが、福岡市に開業する溝口喜六、藤木廣等の博士は最も出色した人、尙助教の淺田爲義、内藤三郎、を始め鈴木諒爾等の醫博も亦同教室出身の有力な人である。

教授神中博士は兵庫縣の人で、三十七歳の新進。大正三年東大醫科を卒業したが、大里俊吾、三輪誠、庄司義治、大森大亮等の醫博と同期である。卒業後助手として東大に研究し、十年より神戸に神戸病院を經營し先年歐米に留學したが、在外研究中住田博士の後任に推薦され、大正十五年三月歸朝、直ちに着任した。

「痲痺筋ノ人工的「ノイロチザチオン」ニ關スル知見」と題するものを主論文として、尙外に參考論文として三篇を東大に提出し、大正十一年一月學位を得た。

衛生學教室と

宮入慶之助博士

大平得三博士

千代の松原の夜が靜かに幕を上げ、博多灣の風涼しい拂曉、白砂を踏んで鋭敏な鼻の先をモグ／＼さして嗅ぎ廻る博士がある。其の博士は叢の中にある、まだほや／＼の一塊の人糞、それは夜遊びの人が残すもので随分澤山あるさうだ——を求めては猫が鼠を啞えた時の様に喜び肩にかけた採集罐に叮嚀に収めては、亦次から次へと嗅ぎつけて行く、集められた幾十人かものは、やがて其の研究室に運ばれて叮嚀に顯微鏡にかゝるかうして十數年間人糞を嗅ぎ廻る博士は、住血吸蟲研究の權威として學界に其の名を謳はれる九大衛生學の宮入慶之助博士其の人である。

『宮入先生は實に世界的學者だ』

とは學生や研究員の心からもれる偽りのない言葉である。博士は大正十四年六十一歳を最後に多年住み馴れた九大に

『おさらば』

をして、今は名譽教授として餘生を送つてゐる。

『人間は六十を超えともうろくするものだ、六十を超えた人が、俺はまだしつかりして居る等といふのは、既にもうろくして居るからだ』

とまだ九大にない停年制を自分獨りで、サツサと實行して其の職を辭めた。

『糞は我等の親友だ、教科書だ、それが臭くて堪るものか』

と博士は平氣で糞を相手に九大の十數年間を送つた。今年六十二歳である。長野縣の人、酒を好むが未だ曾て酒癖の悪かつた事を聞かない。又宮入員の發見者としてもよく知られてゐる。

九大衛生學教室は此の有名な宮入慶之助博士によつて創められた。博士は明治三十七年、歐洲留學より歸朝し、直ちに九大に來任して、十年一日の如く孜々として衛生學教室の建設に力を致した。然しながら不幸昨年（明治三十一年）の火災で法醫學教室と共に燒失してしまつた。今博士の後任として博士の高弟大平得三博士が其の依鉢をうけて同教室の再興を圖つてゐる。

明治二十三年東大醫科を出で、同學助手を経て、同二十四年京都府醫學校教諭となり同二十七年辭して大學院に入つた。在學一年にして、同二十八年一高教授に任じ、同三十一年西國マドリッド府に於ける萬國衛生及びデモクラフキ會議に委員として參列、同年歸朝、直ちに兼任内務技師、同三十二年衛生醫務課長、同三十五年獨逸留學、同三十七年歸朝、直ちに京大福岡醫科大學教授となつた。同四十四年九大醫科教授に任じ、大正八年歐米各國へ出張した。同十二年米國ロツクフアラー財團の招聘により三浦博士等と共に米國に渡り、醫學教育其の他を視察して歸朝した。

博士は京大總長の推薦により明治三十八年十二月、學位號を得た。「衛生學」「生理講義」「寄生原蟲研究の栞」などを著はしてゐる。

現教授大平得三博士は明治十五年山形縣の生れで、今年四十五歳である。明治四十一年九大を優等で卒業したが、教授小野寺道助、高木繁醫博等は同期生である。大正二年宮入博士の下に助教授をして居たが、今又宮入博士が自分の後任として推薦した。よく宮入博士の血を受け、多少皮肉的な處はなるが、淳々として、一語一語を齒切れよくはき出してゆく處は落ち付いたものである。熱心なクリスチャンで毎日曜、教會の演壇に其の姿を見ない事はない。

博士は九大醫學部の助教授に任ぜられて、同四年米國に留學、紐育市コロムビア大學に、次いでロツクフエラー醫學研究所に研究し、同五年歸朝、同九年辭職し、直ちに東洋紡績會社に入り、衛生課主任として工場衛生研究に従事して居た。同十四年恩師宮入慶之助博士が九大を辭めた時其の後任として赴任した。主論文「ストロンギロイデス、

ステルコロリス』寄生症の人體組織學的並に動物實驗的研究『特ニ本蟲ノ自家傳染ニ就テ』を九大に提出し大正九年十一月學位を得た。尙博士の結核豫防に關する研究は有名で、九大に於ける少壯教授として將來を大いに囑目されて居る。

細菌學教室

小川政修博士

由來九大には訥辯な學者が多い。九大の創設者大森治豊博士然り、現教授小川政修博士亦然りである。小川博士は我國細菌學界の泰斗として、又寄生原蟲學及び病理細菌學の權威である。男爵北里柴三郎博士、野口英世博士、松下禎二博士等細菌學からは幾多の偉人を出してゐるが、我が小川政修博士も亦之れに次ぐ細菌學界の大立物である。

博士は明治八年九月金澤市に生れ、今年五十二歳である。明治三十六年東大醫科を卒

業し、卒業後京大に入り助手となり、同三十八年京大福岡醫科大學の助教授となつて、二ヶ年間獨逸に留學し、ミュンヘン大學に學び、ドーフライン教授の下に研究、續いて佛蘭西に渡り、巴里、バストウル研究所で、メニル博士に就き寄生原蟲學研究をし、大正二年三月歸朝、直ちに九大教授に進み、九州齒科醫專の講師をも囑託されて居る。夫人圭子は理學博士伊藤篤太郎の妹である。

九州帝國大學總長の推薦により、博士となつたのは大正三年十一月である。『自然科學者としてのゲーテ』『住血原蟲論』其の他の名著がある。

産婦人科教室

白木正博博士

白木正博博士は九大事件で辭職した今淵恒壽博士の後を受けて、九大産婦人科教授と

して、今年一月東大より赴任した。榊博士の後任として、慶應大學から來た精神科の下田光造博士の平民的なのに較べると、多少官僚的な處はたしかにあるが、割合に「靜かな」學者である。九大事件で可なり問題にされた産婦人科だから、相當やりにくいだろうが博士は

『學者は學者として只働けばいいのだ』

と云つて居る。博士の赴任と共に同科には我國でも他にない程のレントゲンの設備をした。博士の活躍は之れからであるが「靜かな」學者である博士は決して九大事件の様なものには惹き起さないだらう。

教授は長野縣の人で今年四十二歳。明治四十四年東大醫科を優等で卒業し、醫學博士栗山重信、平山濤平、正路倫人助、竹内松次郎、佐藤邦雄、佐谷有吉、立柄俊毅等と同期生である。卒業後大學院に入り、大正四年助手となり、同六年講師を囑託され、同時に三井慈善病院婦人科醫長として就任し、同十年同學助教授に任じ、獨、英、佛へ留學

同十三年歸朝、次で教授に進み、十四年一月九大教授に任じた。

博士の主論文は『家兎卵巢ニ對スル硬「レントゲン」線ノ作用ニ就テ』にして外に一篇及び參考論文として二篇を東大に提出して大正十年七月學位を得た。『最近「レントゲン」放射線之原理及使用法』『産科治療法』『白木助産婦學』等の著書がある。

齒科學教室

問田亮次博士

帝大派の齒科から出て最初の醫學博士となつたのは、京大教授の本永七三郎博士と、九大齒科教授問田亮次博士の二人である。九州に齒科講座を置く處は九大のみにして、九州齒科醫學界を牛耳つて將來立つ者は此の問田博士の他に無からう。博士は初め三宅外科に研究してゐたが大正十年歐米留學より歸朝し、十一年助教授に進み、やがて教授

となり、九大に齒科を開設した。博士は温厚であつて、嗜好として多少酒を嗜む。明治十六年佐賀縣に生れ、今年四十四歳である。小野寺、大平、金子、高木、後藤諸教授等と共に九大出身の教授である。九大を卒業したのは明治四十三年で、奥田祐安等の博士と同期生である。卒業後同學部の副手及び助手を経て大正七年同學講師囑託となり、同年英、米、獨、佛、瑞の各國に留學し、歸朝後九大助教授となり、やがて教授に進んだことは前述の通りである。主論文「膽道ニ關スル余ノ研究成績」外に參考論文一篇を九大に提出して、大正九年三月學位を得た。

小兒科教室と

伊東祐彦博士

明治二十八年即ち九大がまだ福岡縣立病院時代から、今日にいたるまで致々として九

大のために働いて來た人の一人に伊東祐彦博士がある。九大の小兒科は此の人によつて築かれたものである。伊東博士が小兒科部長となつたのは明治二十八年である。其の後博士は附屬醫院長となり、學部長となり、今又附屬醫院長となつて、其の手腕を發揮して居るが、此の忙がしい生活の裡にも、博士は決して「小兒科教室の建設」を忘れなかつた。小兒科教室が出来てから、茲に三十有餘年、此處に育てられた人物は實に我國小兒科學界の一分野をなして居る。今小兒科教室の助教授をしてゐる箕田貢博士、大阪回生病院小兒科の矢野雄博士、福岡市に開業する田原盛、青森縣立病院の大原清之助、名古屋開業の佐野寅一、福岡市の合屋友五郎等の醫博は同教室の出身者中出色した人物であらう。

博士は慶應元年米澤市に生れた。舊名を熊次と云つた。今年六十二歳である。工學博士伊東忠太の弟である。又法學博士子爵平田東助の甥にあたる。博士は實に正直な人格者である。小刻みに走るやうに歩いて居る處を見ると、如何にも落ちつきがなさうで

あるが、却々ドツシリした豪膽な處がある。事に臨んで決して輕舉しない。天下の視聽を集めた九大事件で辭職した今淵博士の後をうけ、附屬病院長となつて、其の後始末をドシ／＼やつてのけたのは、何んと何つても多年の經驗を有する老練家である。既に院長たる事二度、學長たる事一度、今や九大醫學部の中心人物である。九大事件で學内が騒然としてゐた時、人格者の博士は世人の排難一つ受けず超然として診療に従事してゐた。博士は明治二十四年東大を出で、三宅速、望月淳一、中西龜太郎、賀古桃次、古川市次郎等の博士と同期生である。卒業後直ちに助手として小兒科教室に勤め、二十八年福岡縣立病院小兒科部長となり、三十三年福岡縣技師に任ぜられ、三十四年獨逸に留學した。留學中伯林大學に學び、三十七年歸朝、直ちに京大福岡醫科教授に任じ、四十三年附屬醫院長、大正二年附屬醫院長を免ぜられ、九大醫科大學長に補せられた。同八年依願免學長、其の後專任教授となつたが、大正十四年九大事件後、直に又附屬病院長となつた。

主論文「日本ニ於ケル流行性赤痢様急性小兒病タル疫痢ノ原因ニ就テ」を東大に提出し、三十九年三月學位を得た。外に副論文五篇あり、「育兒の心得」「學齡異常兒の病理及び教育」「疫痢と赤痢」等の著しがある。

耳鼻咽喉科教室

久保猪之吉博士

九大耳鼻咽喉科教室は教授久保猪之吉博士によつて建設されたといつてよい。博士が明治四十年一月、今から二十年ばかり前、歐米留學から歸朝した當時は實に貧弱なものであつた。今の整形外科の裏に皮膚科があつて、其の表が耳鼻科であつた。研究室と名付くべき研究室は勿論なく、助手が僅に三人であつた。それでも患者は相當にあつたので博士は此の三人の助手を相手に毎日午後の四時頃迄、中食をぬきにして働いた。今長

岡市に開業する井利映、大阪市好仁病院長小野道衛の兩醫學博士及び福岡市に開業してゐる陸軍二等軍醫勝冶一の三人が即ち當時の助手である。二十年を経た今日教室は新築され、二十餘名の教室員、二百名に上る教室出身者を有し、遠く獨逸よりクライデウルフ、米國よりアルベルト等遙々訪れて、研究にいそしむ隆盛な今日を見て實に今昔の感にたへぬ。

博士は明治四十三年教室員及び出身者を會員として四三會を組織し、現に其の會頭となつて居る。同會員は既に二百名に上り内地は勿論遠く滿洲、臺灣等に分布されてゐる此の教室から生れた主なる人には、前記三名の他に久保護躬、江浦重成、高崎文雄、河原治作、河野亮太郎、香宗我部壽(以下略)等の醫學博士がある。

教授久保猪之吉博士は今年五十九歳である。福島縣の生れで、文學者那の學者である讀書家にして其のよりえ夫人とともに、『わの吉』の名を以てアララギ派の歌人としてよく知られて居る。又博士は春、秋になると、よく蝶の採集に出掛ける。博士の應接室

は採集した蝶の標本と、文學書で埋つて居る。強いて缺點を求むるなら多少短氣な所がある。けれども、弟子を親愛する點は、他の教室に見られない程で、一年に一度擧げる教室の創立記念日等、遠く滿洲あたりから熊々やつて來て博士の溫顔に接する人が多い今日博士の主宰する四三學會々員が二百名を上るにいたつたのも、博士の弟子を愛する賜でなくてなんであらう。十四年六月頃より健康を損じ、住み馴れた教室に別れる筈だつたが、教室員や同僚の懇望により再び此の一月から教室に出てゐる。近頃又俳句をよくやり、よりえ夫人は「嫁ぬすみ」と云ふ短篇集を出版した。弟に久保護躬博士があり金澤醫科大學の教授である。

久保博士は明治二十三年東大を優等で卒業した。中金一、中山平次郎、石原弘博等と同期生である。卒業後同學の副手より助手となり、同三十六年獨逸に留學し、同時に京大福岡醫科助教授に任じ、留學中獨逸フライブルグ大學にて研究し、尙、塊、諸大家の許に研究をかさね、四十年歸朝、直に教授に進んだ。同年獨逸國出版萬國耳鼻咽喉科

中央雜誌及び、萬國耳鼻中央雜誌の共同編輯者に擧げられ、四十二年九州耳鼻咽喉科地方會を創め、其の會頭に選舉された。大正二年ロンドン市開催の第十七回萬國醫學會に列席するため再び渡歐し、此の序に歐洲各地の大學を視察し、同三年歸朝した。十年九大附屬醫院長となり、やがて醫院長を辭し、専任教授となつた。又先年歐洲に遊び、最近の學界を視察して歸朝した。

主論文「聽神經ヨリ（特ニ溫的刺戟ニテ）發起セル眼運動ニ就イテ」他に參考論文六篇を東大に提出し、四十年八月學位を得た。「鼻科學」「教育病理治療學」等の著がある。其の専門にかけては我國に於ける權威者であらう。近年獨逸、米國等より博士の指導を乞ひに来る者もあり、其の技倆と専門の蘊蓄は海外にまで知られて居る。又同教室及び其の出身者では、博士の十九年在職記念事業として圖書館を造る事となつて居る。

皮膚科教室

旭 憲 吉 博 士

九大醫學部に皮膚科教室を創設したのは教授旭憲吉博士である。同教室は明治三十九年十一月二十日に設置された。既に二十年の歴史を有し、多くの人物を出して居るが、先年泌尿器科を分立させて、助教授であつた高木繁博士が教授となり、泌尿器科を擔當する様になつた。同教室の出身者には高木繁博士を始め、助教授の坂上虎彌太、小倉市に開業する醫博北原義尊等の他開業醫としては福岡市の高岡達也等がある。

旭博士は明治七年京都市に生れ、今年五十七歳である。淡白で、温厚な學者であつて決して敵をつくらぬ處から、常に衆望を負うてゐる。堂々たる體軀を有し、五十七歳の今日迄病氣と云ふ病氣はした事が無いと云ふ。夫人とし子との間に二男二女がある。

博士は近年毛髪より内服發毛劑を發明して、自ら之れを玄華と名づけ、益々學界に有名になつた。又九大佛教青年會々長として無科診療所等を建設して、貧民の救援に努めてゐる。

博士は明治三十二年東大醫科を卒業し、稻田龍吉、鹽田廣重、木村徳衛、藤井壽松、昭内豊、雨宮量七郎、榊保三郎、山崎正董、中原徳太郎、森安連吉、戸上駒之助等の醫博と同期生である。卒業後更に大學院に入り、同三十六年獨逸に留學し、在學中京大福岡醫科大學助教授に任じた。同三十九年歸朝し直ちに教授に進み、次で九大醫科教授兼附屬醫院長となり、大正十年附屬醫院長をやめ、兩年專任教授となる。

主論文『三十三年間經過セル全身脫毛症ニ於ケル解剖的所見』外參考論文三篇を東大に提出し、明治四十一年三月學位を得た。『泌尿生殖器病』の自著がある。又『皮膚診斷及治療法』『花柳病診斷及治療法』の二書を醫博山田弘倫と共著してゐる。

泌尿器科教室

高木 繁 博士

高木繁博士は九大醫學部皮膚學、微毒學講座擔任教授として知られて居る。博士は今年四十五歳であるが、明治二十年東京で生れた。虚心坦懐で實に飾り氣のない氣持のよい學者である。

『あの先生はいゝ人だ』

とは博士に一度會つた人の心からもれる言葉である。九大出身の少壯教授として後藤、小野寺、金子、大平の諸教授等と共に大いに囑目されて居る。

明治四十一年九大醫科の出身にして、高安慎一、田村於兔、角田俊吉、矢野雄、明石眞隆、鈴木三伯、大平得三、小野寺直助、岩淵友次等の醫博と同期生である。卒業後直

ちに醫學部病理學教室に入り、後ち皮膚科學教室に轉じ、助手となり、大正二年助教に任ぜられ、同五年米國に留學、同七年歸朝、やがて教授に進み、泌尿器科が分立するにあたり其の主任教授となつた。

主論文「攝護腺ノ大サト重量」の外に參考論文四篇を九大に提出し大正九年七月學位を得た。

生理學教室

石原 誠 博士

九大生理學は明治三十九年迄は醫化學の後藤元之助博士が兼ねて講義をしてゐたが明治三十九年九月二十日現教授石原誠博士が歐洲留學から歸朝すると同時に分れて、同教授が擔當する事になつた。爾來約二十年間石原教授は生理學第一講座を擔任して、現在

に及んでゐる。同教室から今日多くの人材を出すにいたつたのは、實に博士の努力の賜であると云つてよい。尙又生理學の第二講座を擔任する板垣博士も博士と共に生理學教室の爲に多年盡して來たものである。同教室出身の出色した人物は、教室の講師をしてゐる元熊本醫大教授高安慎一博士の他、緒方大象、岩井誠四郎、九大農學部教授瀨藤理一郎等の博士がある。殊に瀨藤教授は理學博士の論文を此の教室で研究した人で、恐らく九大醫學部の各教室で理學博士を出したのは、此の生理學教室の他には無いだらう。博士は我國生理學教授として東大の大澤博士と共に、生理學界の權威である。今年四十八歳で、學部長として令名あつた高山正雄博士の後を受けて此度學部長の要職に就任した。比較的落ちついた處があつて、事をなすに輕學しない博士は又學部長としても、高山前學部長に優るとも劣らぬ手腕を揮ふであらう。博士の兄に石原弘博士あり、弟に石原修博士あり三人兄弟の博士として有名である。

博士は明治十二年五月、兵庫縣伊丹町に生れた。明治三十四年の東大醫科出身で、恩

賜組の一人である。三宅鏞一、長澤傳六、喜多村朔治博士等は同期生である。第一高等學校を経て東大に入つたもので、東大卒業後は、生理學教室に研究し、助手となり、三十五年歐洲に留學、同三十六年京大福岡醫科大學助教となり、同三十九年歸朝、直ちに教授に進んだ。尙博士は其の後熊本醫大生理學の講師となり、大正十四年十月頃から又教授として講義に出張して居たが、學部長になるに及んで、熊本醫大教授の兼職を辭した。が、しかし熊本醫大生理學教室も亦博士がかうして最初から力をつくしたもので同教室の恩人でもある。

明治四十年四月、主論文『生理學實用簡便護護檢壓器ニ就テ』の他參考論文として『迷走神經作用ニ對シテ中性ナル肺容』其の他四篇を東大に提出して醫學博士となつた。夫人みね子は陸軍々醫監菊池篤忠の二女、醫學博士菊池米太郎の妹である。

生理學教室

板垣政彦博士

九大生理學第二講座を擔任する板垣政彦博士は石原博士と共に九大生理學教室の創設者といつてよい。博士は京大を卒業して、間もなく九大助手となり、やがて助教授より教授に進んで生理學第二講座を擔任する様になつた。今年四十五歳であるが、應答禮を重じ、頗る溫厚な學者である。早くから九大の學生監として學生の人格陶冶に努めて來た東大の生理に大澤、京大に正路博士等があるに對し、九大に石原、板垣兩博士あるのは九大の誇りである。

博士が京都帝大醫科を卒業したのは、明治四十年である。卒業後九大助手となり、同四十三年助教授に進み、大正三年獨、塙、英に留學、主に伯林市立モアビート病院にて

研究し、尙續いて英國に渡り、エヂンバラ大學及びケンブリッジ大學にて研究、其の間伯林及倫敦の各地の大學や研究所を見學し、歸途米國に巡り、同六年歸朝、翌七年教授となつた。博士は岩手縣の人、第二高等學校の出身である。

主論文『卵巢黃體越幾斯ノ平滑筋特ニ子宮筋ニ及ボス影響』を九大に提出して、大正九年六月學位を得た。

解剖學教室

進藤篤一博士

九大醫學部解剖學第二講座を擔任する教授進藤篤一博士は九大恩賜組の一人である。衛生學の大平得三、外科の後藤七郎、内科の小野寺直助及び金子廉次郎等の教授と共に母校のために教鞭を執り、母校建設につくしてゐる。博士は山梨縣の人で年齒は漸く不惑

に入る一歳である。我國に於ける解剖學の新進學者にして、殊に脊椎解剖學に關する専門家として有名である。博士は決して尊大振らず、傲慢な態度を示さない人である。

明治四十二年の九大出身で、岩崎徳松、橋本正員等の博士と同期生である。卒業後解剖學教室に入つて研究し、助手となり、四十五年歐洲に留學、ヂツチニゲン、ケー大學ニヒスベルグ兩大學、埃國ウキーン大學に研究し、其の後英、米に渡つて大正二年末歸朝、直ちに九大助教授となり、四年教授に進み解剖學第三講座を擔當した。

其の博士號は九大總長の推薦により、大正六年五月授けられたものである。

精神科教室

下田光造博士

九大精神科教室は、九大事件で辭職した榊保三郎博士が、明治三十九年末歐米留學から

歸朝し、直ちに九大に赴任して確立されたものである。博士は『若返り法』の研究をして、和製スタイナーツハの綽名があつた。此れがため精神科も亦博士の若返り法で有名になつたものである。同教室から出た人は、精神科學界には相當あるが、同科の助教授たる醫學博士諸岡存、新名常造、林能昭等は出色した人物であらう。神博士の辭職後、慶大教授下田光造博士が來任した。九大事件で相當天下に知られた精神科も、私學出の下田博士によつて面目を一新するであらう。

教授下田光造博士は鳥取縣の生れで今年四十二歳である。慶應大學の教授として相當學界にも認められて居た博士は、官學旺盛の今日、獨り私學から官學に飛び込んだ。博士の九大に於ける活躍は、之れからだ、赴任の翌日から、醫局員と共に醫局に馬鹿話をしながら食卓を共にする處等、流石に私學出丈けに平民的である。博士は何時會つてもニコ／＼して居る。決していやな感じを與えない温厚な人である。東大の松田博士と共に精神病學科の新智識として、當世學界に於ける新進の學者である。

明治四十三年東大醫科を卒業した。増井胤次博士と同期生である。卒業後直ちに助手として精神病學教室に勤め、大正二年巢鴨病院醫員に就任した。同六年東大醫科講師となり、兼ねて東北帝大醫科講師囑託を受け、同八年東京府技師に任じ、府立松澤病院長となつた。同十年以來慶大醫學部教授として就任し同時に歐洲留學の途に上り、同十三年夏歸朝し、大正十五年一月九大醫學部精神科教授に進んだ。

主論文は『癲癇者腦ノ研究特ニ癲癇性精神變質狀態ノ解剖學的基礎ニ就テ』と題するもので、外に參考論文數篇があり、大正十年十二月東大に提出して學位を得た。『最新精神病學』の名著がある。

出色した人物評論

その業績

鈴木三伯

九大出身の少壯學者として、遠く東北青森縣にあり其の名聲をあげてゐるのは鈴木三伯博士である。博士は藤原教悦郎、野村正一の兩博士と共に九大最初の博士として學界に出た。現に青森縣立病院長として、青森縣技師を兼任し東北醫學會青森縣支部會幹事長に任じ、又青森縣醫師會長にもあげられて居る。

九大を卒業したのは明治四十一年であるが、九大講師の高安慎一、教授高木繁、大平得三、小野寺直助等の博士は同期生である。宮城縣佐沼町の人で、今年四十七歳であ

る。學生時代よりよく和歌をやつて居た。九大卒業後は海軍中軍醫として大正元年まで海軍に居り、病氣のため豫備役に編入され、九大内科教室に入つて六年末まで研究したが、後ち茨城縣土浦町の私立新治病院にて同四年まで診療に従事し、次で下關市私立小林病院内科醫長に就任した。六年より九大稻田博士の下に副手として勤め、同七年米國に渡り、瑞西國チュリツヒ大學に研究し、同九年歸朝と共に青森縣立病院副院長として赴任し、同十一年院長となつた。

主論文は『臨床的血液有形成分容量測定法ニ關スル實驗的研究』で外に參考論文として一篇がある。

鈴木孝二

アルカロシスの研究をなして學位を得たのは鈴木孝二醫博である。彼は東京慈惠會醫學專門學校を卒業したものであるが九大の研究科に入り、後藤外科に研究して論文